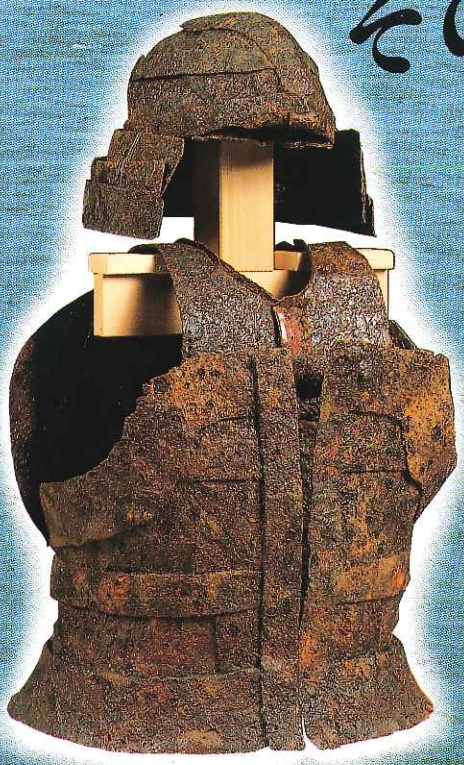
宇治二子山古墳と
その時代



宇治市教育委員会

(1) 宇治周辺航空写真（北から）

(2) 宇治川と宇治橋

巻頭図版第2

北墳西槨 甲冑

南墳 甲冑

巻頭図版第6

挂甲武人

はじめに

宇治二子山古墳は、宇治橋の東側丘陵上に築かれた２基の古墳であり、北側を北墳、南側を南墳と呼んでいます。

この古墳の発掘調査を実施しましたのは、昭和43年初春のことであり、文化財保護体制が充実した今日とは違い、発掘に従事された方々には大変なご苦労があったと聞き及んでおります。また、この発掘調査は、本市での最初の本格的調査でもあり、その意味において記念すべき調査でありました。

調査によって明らかとなりました宇治二子山古墳の内容につきましては、その遺物の豊富さ、種類の多さに目を見はるものがあります。

北墳からは、青銅鏡・玉類・甲冑を始め多量の武器・農工具類が、南墳からは、青銅鏡・玉類・多数の甲冑や馬具、膨大な量の武器が出土しました。

これらは、古墳時代中期の古墳文化を知るうえで大変重要なものであり、昭和61年に宇治市指定有形文化財に指定をし、保存をはかることとしました。

本古墳の発掘調査報告書につきましては、『宇治二子山古墳発掘調査報告』として刊行したところですが、本書は、この報告書の普及版として作成したものです。

本書が多くの皆様の目にふれ、宇治の歴史解明と文化財保護に役立つことを願うものです。

最後になりましたが、本古墳の発掘調査にご協力いただいた関係機関及び各位に対して心より感謝を申しあげます。

平成３年３月

宇治市教育委員会

教育長　岩　本　昭　造

例　言

1．本書は、昭和43年に発掘調査を実施した宇治二子山古墳の調査成果をもとに作成した。

2．本書が収録する遺物写真は、寿福滋の撮影である。

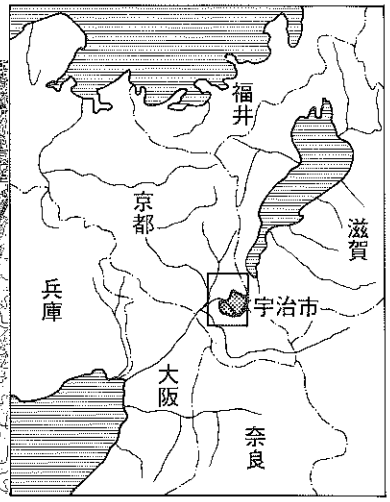
3．本書が収録するイラストは、長谷川陽子の作画である。

4．本書の巻頭のイラストは、桑原智子の作画である。

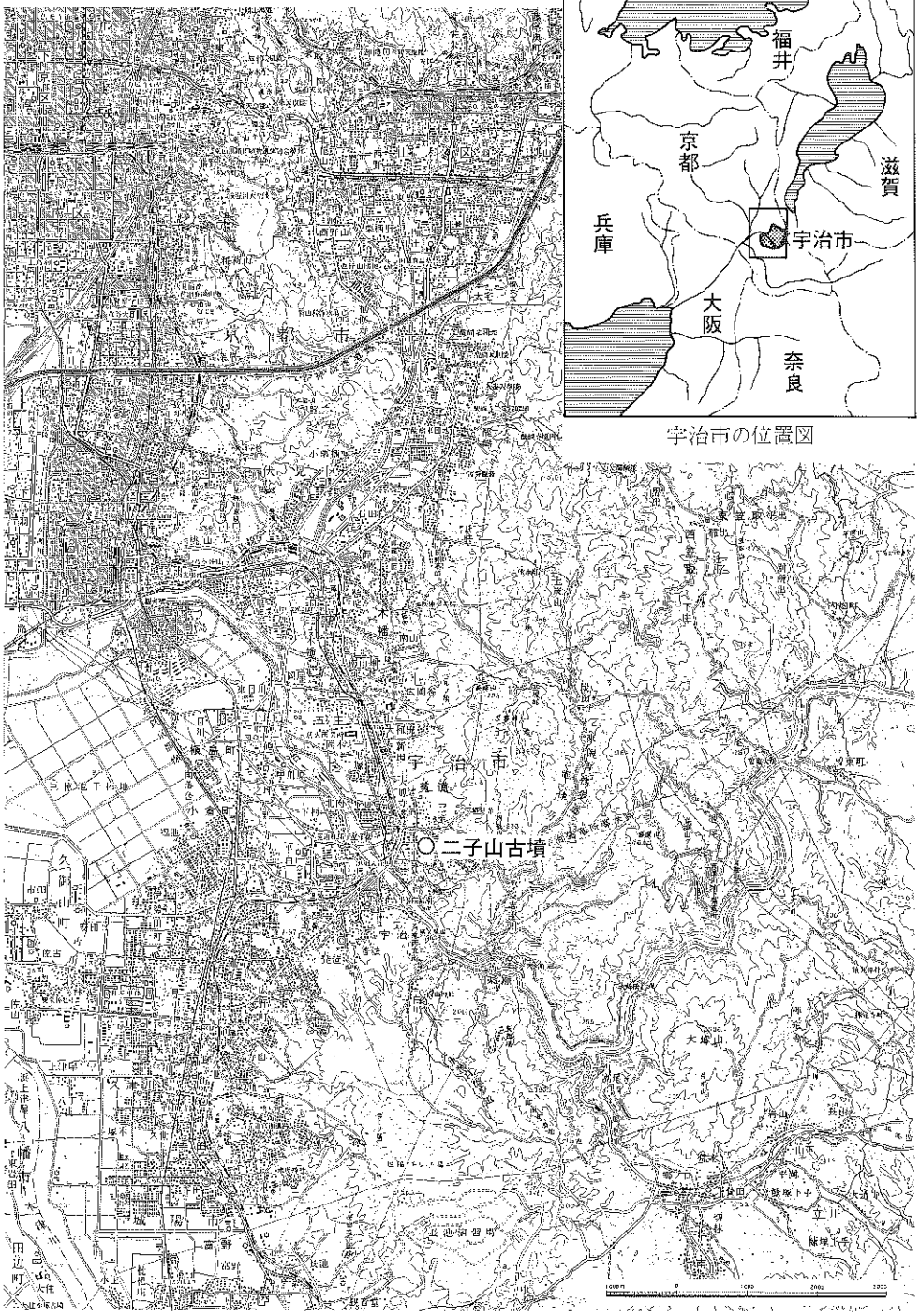
5．本書の作成は、杉本宏、長谷川陽子、山岡万里子が行った。

6．本書末尾の英文要約は浜中邦弘が行った。

7．本書の編集は社会教育課が行い、編集実務と執筆を杉本宏が担当した。また、本書の作成には京都府立山城郷土資料館と城陽市教育委員会の協力を得た。



宇治市の位置図



二子山古墳位置図

目　次

Ⅰ　古墳時代と宇治…… 1
Ⅱ　二子山古墳の発掘…… 5
Ⅲ　二子山北墳…… 9
Ⅳ　二子山北墳の出土品 …… 18
Ⅴ　二子山南墳 …… 33
Ⅵ　二子山南墳の出土品 …… 38
Ⅶ　二子山古墳の被葬者 …… 48
Ⅷ　二子山古墳とその時代 …… 49
おわりに …… 55
英文要約 …… 56

Ⅰ　古墳時代の宇治

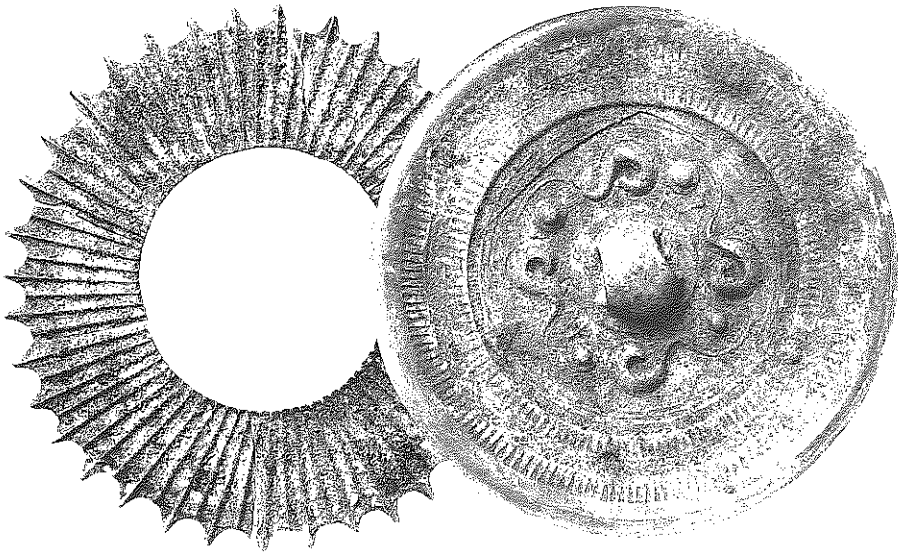
かつて豪族たちが山と見違う程の墓を造り、その権威を示した時代があった。古墳時代である。概ね、4世紀から7世紀に至る300年間を中心とするこの時代には、全国で大小さまざまな古墳が造られた。奈良や大阪に残る巨大な古墳は、この時代を代表するものとして有名である。

宇治市を含む旧山城国南部、すなわち南山城地方での古墳総数は、現在、750基余りである。これは、確認数であるため、古くに消滅したものを含めると1000基近くにはなるだろう。宇治市域に存在する古墳数は、その約20％程の150基余りである。

京都盆地と南山城盆地の接点である宇治市は、旧国郡制下において、山城国久世郡と宇治郡とに分かれていた。宇治市域を貫流する宇治川の東部が宇治郡に、西部が久世郡にあたる。宇治郡は京都市の山科盆地をも含めた範囲であるが、本書が「宇治」を使う場合、その地名起源となった市域の宇治郡部分(宇治川東部)を指すこととしたい。

さて、宇治における古墳の状況を年代を追って概観してみよう。古墳時代の時期区分につ

第1図　仁徳天皇陵古墳(大阪、堺市)



第２図　芝ケ原古墳の鏡と銅釧

いては、従来からの前期（４世紀代）、中期（５世紀代）、後期（６世紀代）とに分ける３期区分を基本として、前期の前に出現期（３世紀後半代）を含めておきたい。

出現期の古墳

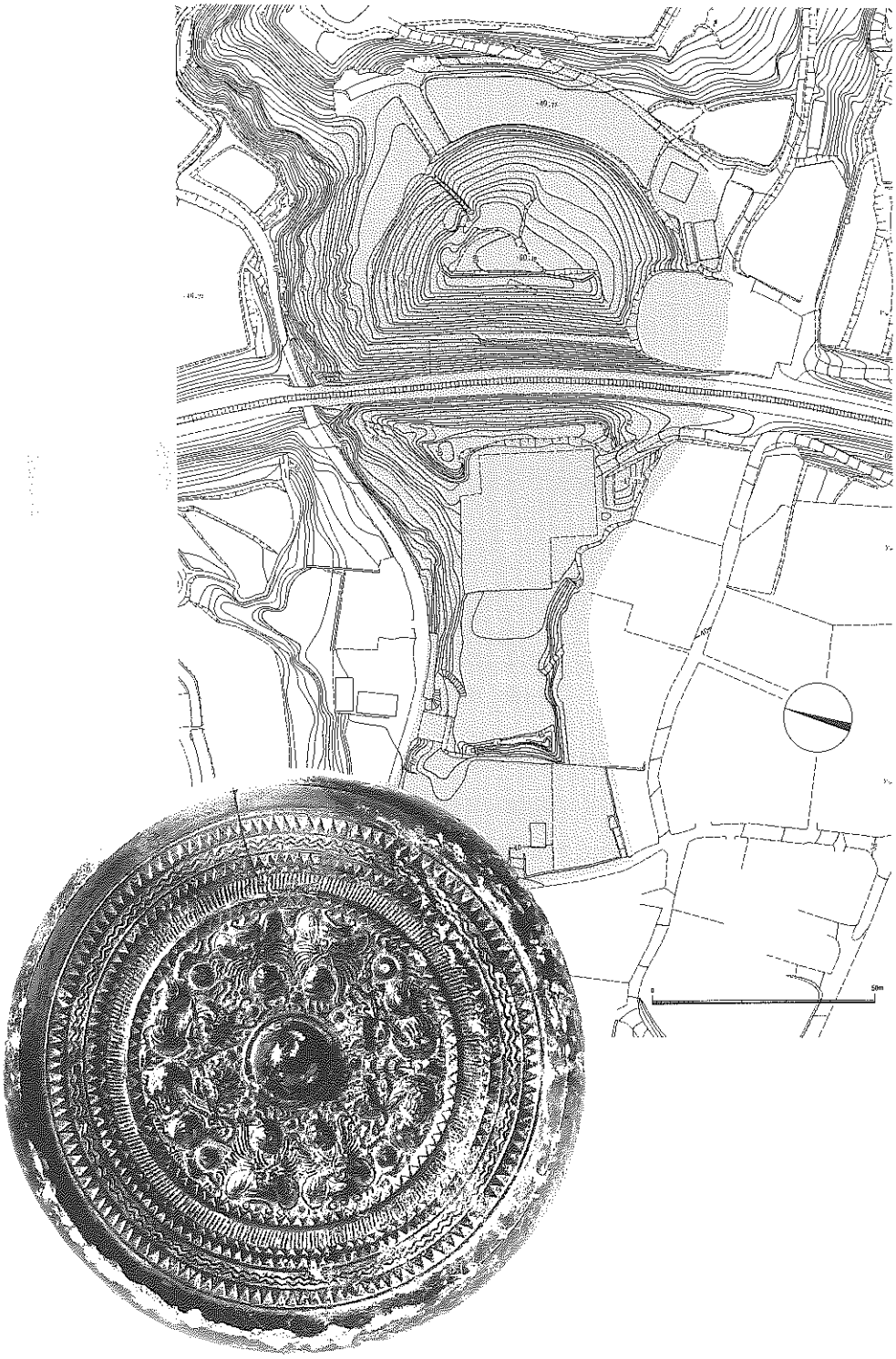
現在、この時期の古墳は宇治で確認されていない。近隣で著名な出現期古墳は、南隣りの城陽市にある芝ケ原古墳である。一辺25m 程の方墳丘に張り出しを持つもので、鏡・玉・珍しい銅製腕輪（釧）・土器等が出土した。土器は庄内式と呼ばれるもので、まさに弥生時代と古墳時代のはざまに造られたものであることを物語る。

前期の古墳

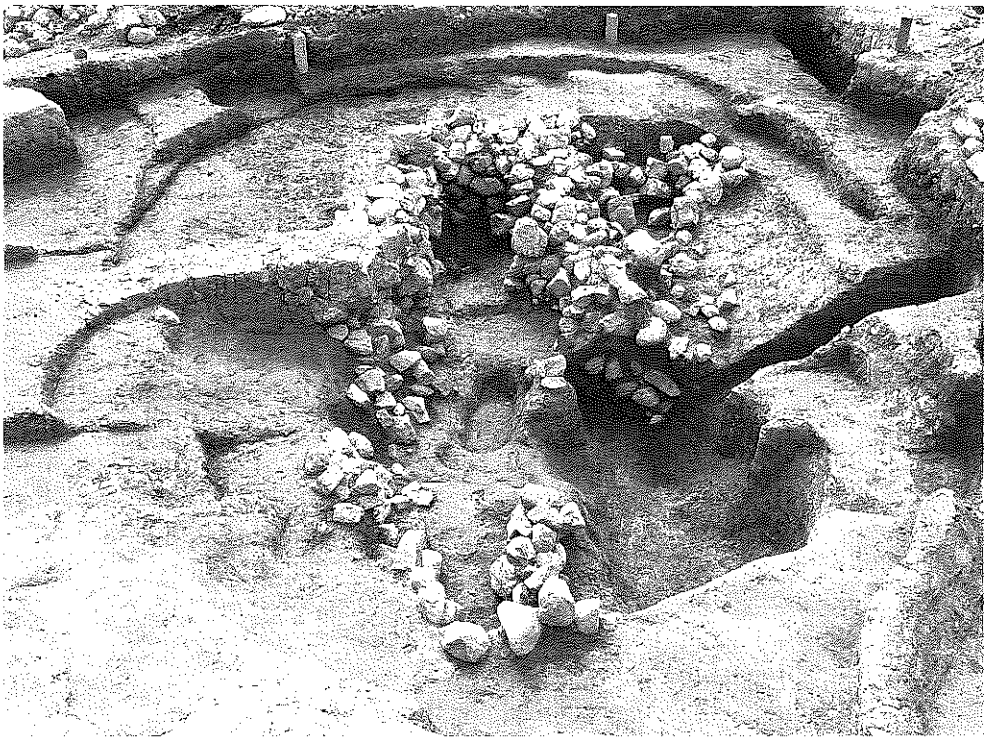
南山城地方最古の前期古墳は、山城町にある椿井大塚山古墳である。全長180m 程の前方後円墳で、俗に卑弥呼の鏡と呼ばれる三角縁神獣鏡が32面以上も出土している。前期後半になると、南山城諸地域で続々と古墳が造られ始める。宇治市域では、西部の太陽ケ丘運動公園内にある直径30m 程の宇治一本松古墳がこの時期のものである。また、早くに失われたため具体的内容は不明だが、宇治市役所西側にあった宇治丸山古墳も前期に遡る可能性を考えている。

中期の古墳

宇治での中期古墳は、宇治二子山古墳と瓦塚古墳が代表的なものとなろう。二子山古墳の内容はここでは省くこととして、瓦塚古墳を少し見てみたい。瓦塚古墳は、二子山古墳北方



第３図　椿井大塚山古墳測量図と出土した三角縁神獣鏡



第４図　瓦塚古墳の礫槨

約２km 地点に造られている直径30m の円墳である。年代的には二子山南墳とほぼ同じの５世紀後半である。主体部は、珍しい礫槨を用いており、出土遺物は多量の玉類、金・銀製金具等である。武器・武具を主体とする南墳副葬品とは異質である。南墳と同時期にこのような古墳が近くで造られている点は注意しておきたい。

中期は、城陽市で久津川（くつかわ）車塚古墳を中心とする大型前方後円墳群が築造されている。この時期、南山城地方支配の核は、これらの前方後円墳群であった。

後期の古墳

後期での宇治は、かなり多くの古墳が築かれている。大型古墳としては、全長110m の前方後円墳である五ケ庄二子塚古墳があり、その背後丘陵に群集墳が形成されている。この群集墳を木幡古墳群と呼ぶ。現在は宮内庁の陵墓に指定されており具体的内容が不明である。但し、測量図を見る限り、120基程の円墳が累々と築かれている状況が看取され、山城地方最大級の後期群集墳であることは間違いない。

以上、足速に宇治の古墳と周辺の古墳について概観した。宇治二子山古墳は、度合は別として、これらの古墳と何らかの関係を有していたことは確かだ。その関係をいかに把握するかは、後述をすることとしよう。

Ⅱ　二子山古墳の発掘

宇治二子山古墳は、京都市の南郊、宇治市宇治山本42番地の丘陵上に造られた古墳である。古墳は、標高70m 程の丘陵頂部に２基が南北に並んで築造されており、北側の古墳を「北墳」南側の古墳を「南墳」と呼ぶ。

古墳が存する丘陵は、大化２年(646)架橋を伝える宇治橋の西方400m 地点にあり、宇治を代表する文化財が集中する宇治川谷口部の一角にあたる。古来、この辺りは交通の要衝として栄えてきたところであり、古墳からは、宇治川渡河点のみならず遠く京都市南部や摂津の山々を望むことができる。

宇治二子山古墳の発掘調査は、昭和43年春のことである。丘陵麓の土取採掘工事が発掘調査の発端であった。現地での調査は、２月19日より４月23日までの65日間にわたって実施された。この調査によって、北墳は直径40m の円墳、南墳は一辺34m 程の方墳もしくは円墳であることがわかり、古墳時代中期中頃から中期後半にかけて継続して築かれた宇治の代表的な首長墓であることが判明した。また、両墳から出土した副葬品の数々は、いずれも古墳時

第５図　二子山古墳発掘風景(昭和43年２月)

代中期を代表する遺物であり、古墳文化を究明する上で極めて重要なものである。

出土遺物のうち金属製品については、千数百年の年月の中で劣化しており、保存処理を実施しなければ原形を保てなくなっていたため、昭和58年度から昭和62年度までの５年間で全品の保存処理と復元作業を行い、昭和61年度には二子山古墳出土遺物全品を宇治市文化財指定条例に基づく宇治市指定有形文化財に指定をし、永く将来に伝えることとした。

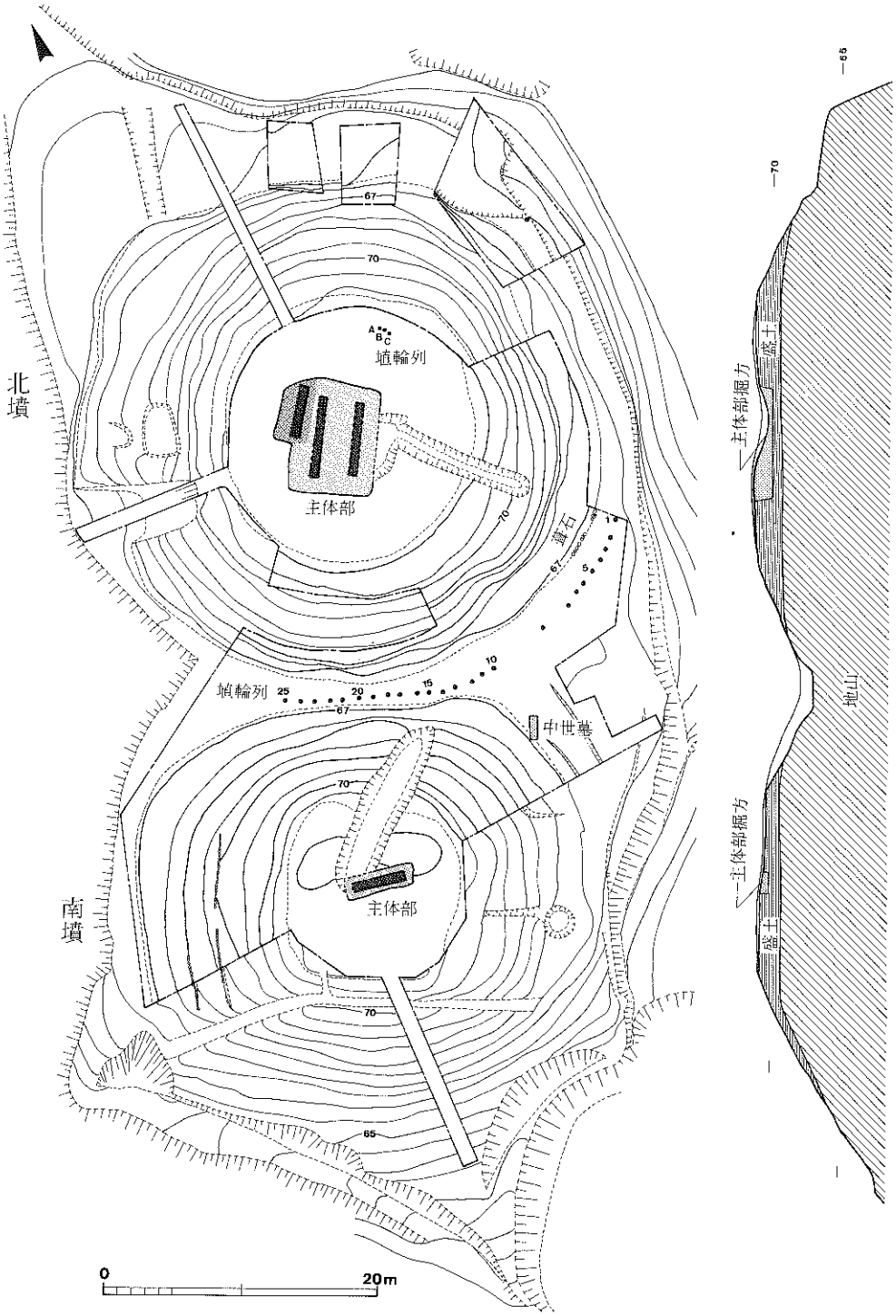
このように、二子山古墳は、宇治市が最初に取り組んだ本格的な発掘調査であったとともに、五ケ庄二子塚古墳(前方後円墳、全長110m)・瓦塚古墳(円墳、直径30m)・庵寺山古墳(円墳、直径56m)などとともに本市の古墳時代を代表する遺跡の一つでもある。

本古墳の調査成果の詳細については、『宇治二子山古墳発掘調査報告』に述べたところであるが、ここでは、その要点をまとめ、二子山古墳の内容について紹介をしてゆきたい。そして、二子山古墳が造られた時代、宇治はどのような環境の中にあり、そしてその中でこの古墳を造りあげた人物は、いかなる人達であったのかを考えてみたい。

では、二子山北墳と南墳の内容と出土遺物の主要品について、その概略を順次説明してゆこう。

第６図　二子山古墳の風景(昭和43年)

第７図　二子山古墳の周辺



第８図　二子山古墳測量図

Ⅲ　二子山北墳

二子山古墳北墳(以後北墳)は、丘陵頂部の北端に造られた古墳であり、墳丘直径40m、高さ4.3m を測る円墳である。

墳丘の裾部には、約1m 間隔で円筒埴輪(はにわ)列がめぐり、また、墳頂部でも埴輪列の一部が発見されている。また、墳丘裾部では、葺石(ふきいし)の一部が見つかっており、かつては墳丘全体が河原石の葺石によって覆われていたことがわかる。

古墳の築造方法は切り土と盛り土によって行われている。すなわち、自然の丘陵頂部の北半分を、まず削り出しによって円錐台形に整形し、その上に盛り土を行い古墳全体を造りあげているのである。この時、削り残された丘陵頂南側の自然地形は、後に二子山古墳南墳として利用されることとなる。

北墳の墳丘裾埴輪列の動きを見ると、南墳との間の埴輪列のみが弧を描かずに直接的に並んでいることに気付く。これは、後に南墳として利用される南側自然地形が北墳埴輪列を圧迫したことに起因している。

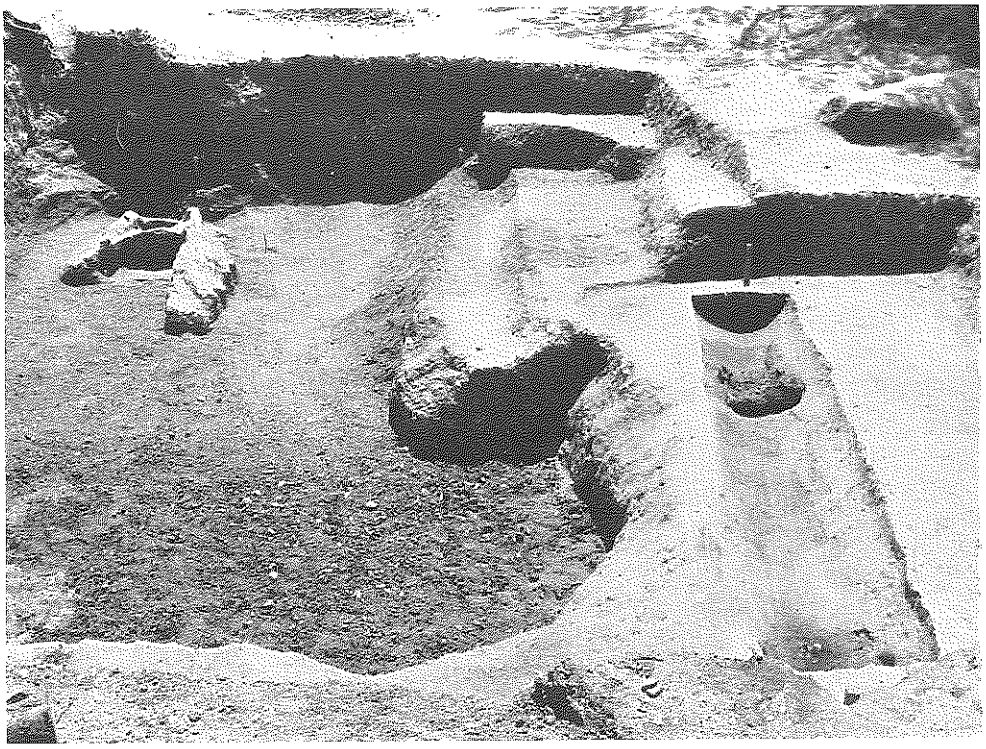
第9図　二子山北墳全景(昭和43年)

北墳での埋葬施設(主体部)は、墳頂部中央付近で３基が見つかった。いずれも概ね南北方向を向いている。それぞれの位置関係より、東槨・中央槨・西槨と名付けた。

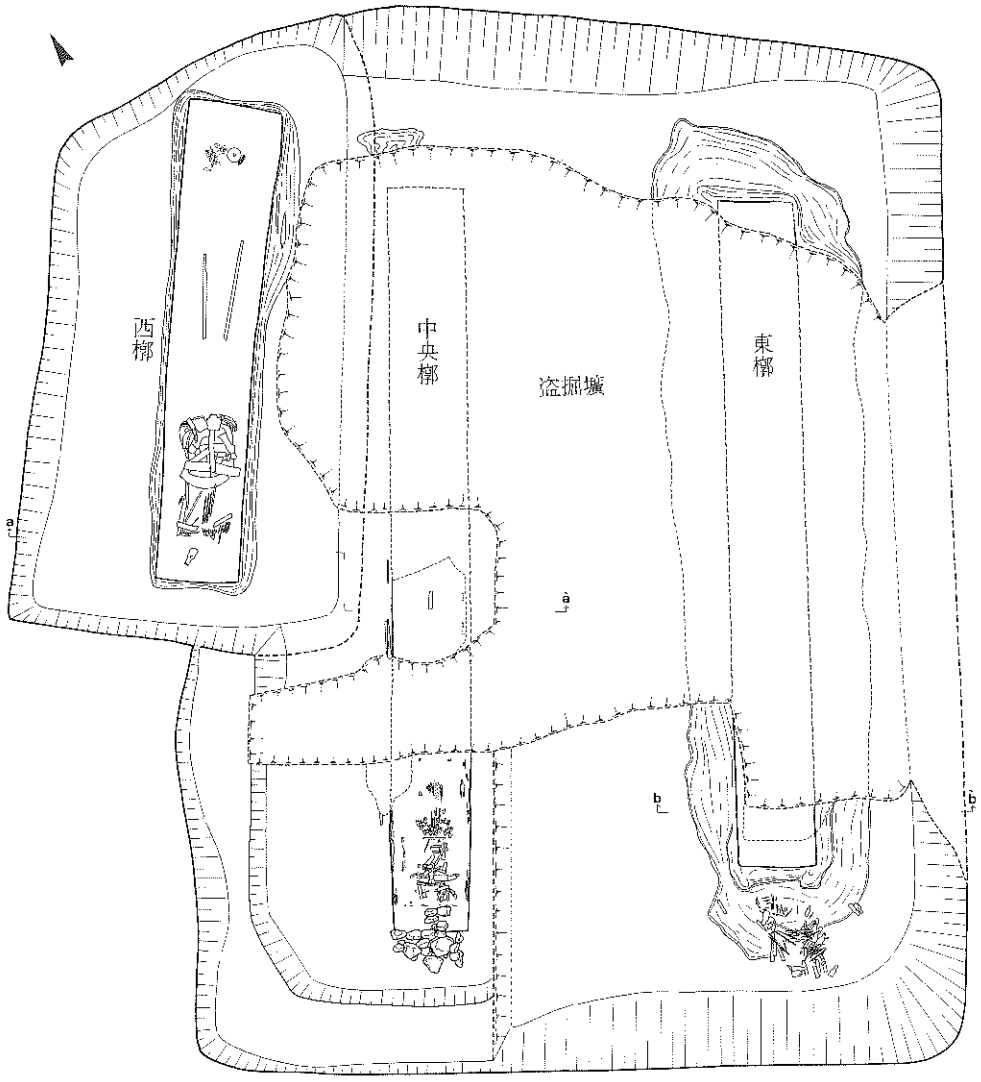
これらの主体部は、同時埋葬されたものではなく、それぞれ一定の時間差をもって順次埋葬されたことが、土層等の状況より理解できる。埋葬順序については、東槨、中央槨、西槨の順となり、初葬である東槨は、最も深くかつ古墳中心部に置かれている。

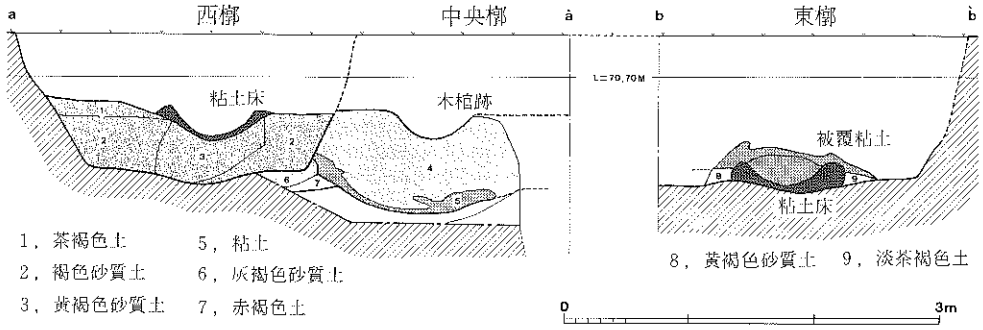
東槨は、南北8.5m、東西6.2m の大きな墓壙東側に置かれており、中央槨はこの大型墓壙がいったん埋め戻された後に、東槨西側に並んで新たに埋葬されている。すなわち、当初は、この大型墓壙に２棺埋葬が予定されたが、何らかの事情で東槨のみが埋葬され、後に中央槨が当初の予定位置に埋葬されたと予想することができる。

西槨は、この両槨の西端に最後に埋葬されており、その規模も両槨の半分程の大きさである。但し、東槨・中央槨は、盗掘によりその大半が破壊されており、本来の内容を知ることができないのに対し、西槨は中心を大きくはずれ埋葬されていたためか、盗掘の災を受けずに完全に残っていた。これによって、失われた２槨の本来の姿や内容についても一定の予想が可能となり、北墳の状況を究明する上で好運であったことは言うまでもない。



第10図　３基の埋葬主体(北から)





1，茶褐色土　5，粘土
2，褐色砂質土　6，灰褐色砂質土
3，黄褐色砂質土　7，赤褐色土
4，褐色土
8，黄褐色砂質土　9，淡茶褐色土

第11図　北墳主体部実測図

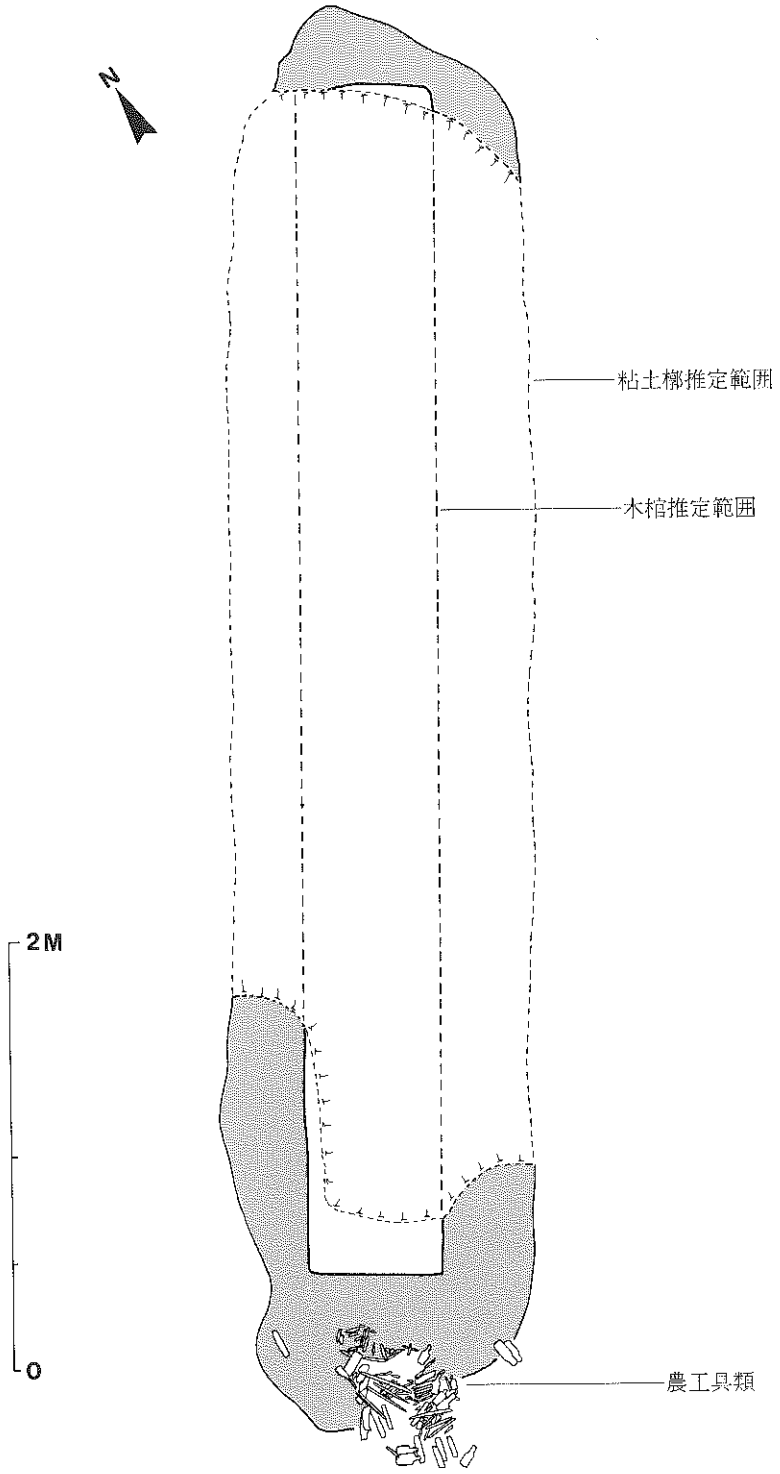
東　槨　東槨は、北墳築造時に埋葬された主体部で、墳頂下1.4m で発見された。盗掘により中央部分は完全に破壊がされており、両端のみが遺存をしていた。

構造は粘土槨である。粘土槨とは、木棺を粘土で完全に覆う埋葬方法で、古墳時代前期から中期にかけて良く用いられている。東槨の木棺は、その痕跡から測定すれば、全長5.6m、幅0.6m 程を測る長大なものを使用していたことがわかる。割竹形木棺（わりだけがたもっかん）と呼ばれる形式である。割竹形木棺とは、長大な丸太を半截し、そしてそれぞれ内刳りをして棺としたもので、高野槙（こうやまき）が一般的に使われていた。また、棺内部は赤色顔料によって真紅に塗られていたらしく、木棺が完全に腐朽しても、その色は粘土に鮮やかに残っていた。

遺物は、当然木棺内に多くが副葬されていたであろうが、盗掘によって棺内遺物はすべてが失われ、棺外南端部の木棺を被覆した粘土上に置かれていたもののみが残っていた。ここから発見された遺物は、すべて鉄製農工具類であり、総数90点余りを数える。

北墳の初葬である東槨の年代については、副葬品の内容と墳丘に樹立された埴輪の形式（川西宏幸氏編年第Ⅲ期）から見れば、概ね５世紀中頃の古い段階に想定することが可能と思われる。

第12図　東槨南端の副葬工具類



第13図　東槨実測図

中央槨　中央槨は東槨に次いで埋葬された主体部であり、墳頂下0.8m で発見された。盗掘により北側３分の２が破壊されていた。

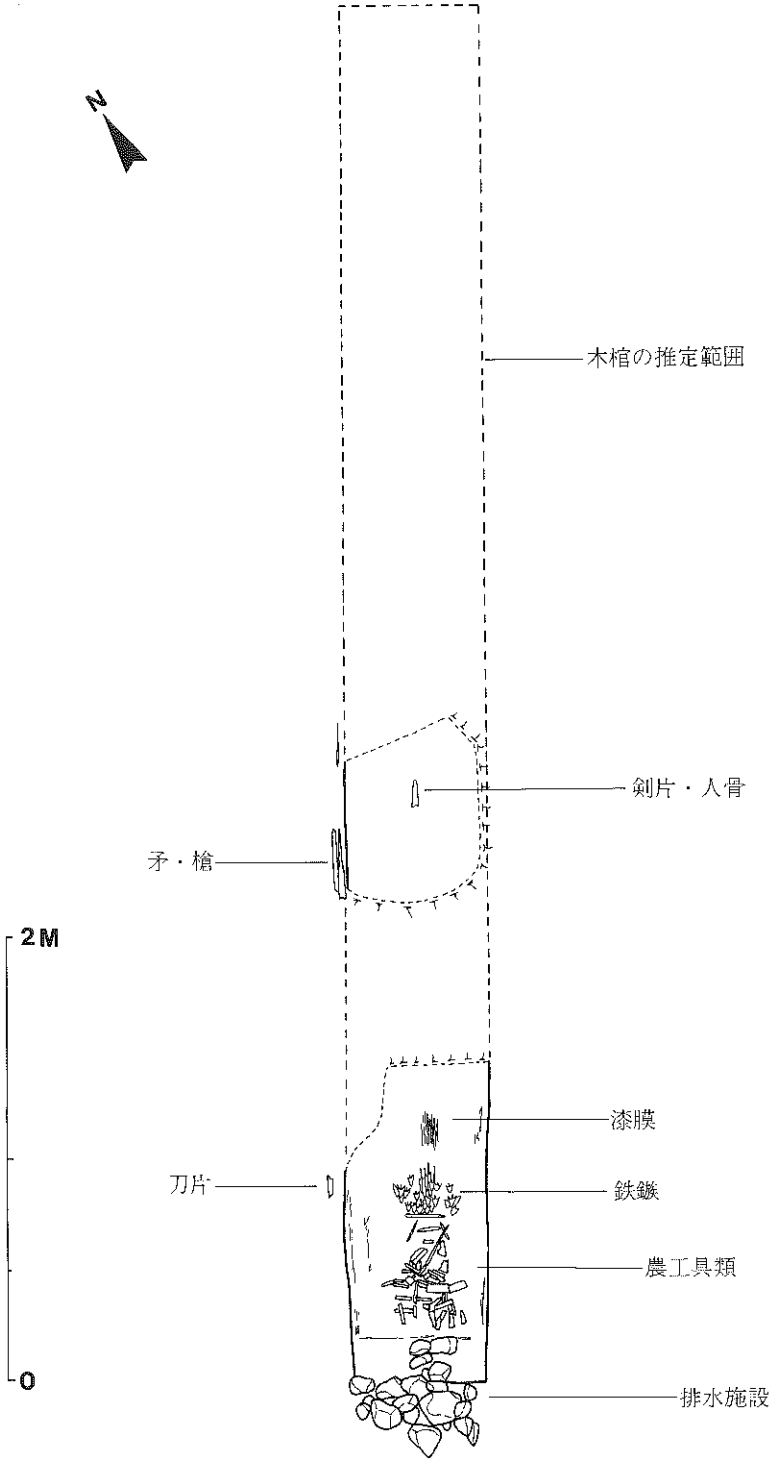
構造は、割竹形木棺の直葬（じきそう）である。直葬とは、木棺を直接土中に埋葬する方法である。中央槨の木棺全長は、盗掘により確認できないが、状況的には東槨と同規模の5.5m 程が想定できる。棺内には赤色顔料が塗られていた。また、棺の南端部分には河原石がまとまって置かれており、排水施設と考えられる。

副葬品は、棺内と棺外より発見された。棺内の副葬品は、棺南端部のみがかつての状況を留めており、鉄製農工具類60点余りと鉄鏃50点余りが認められた。また、棺が一部島状に旧状を留めていたところでは、剣の破片と人骨片を発見することができた。

棺外での副葬品は、棺の西側ぞいに、矛と槍と刀が置かれていた。

中央槨の年代については、副葬品の内容と東槨との埋葬順序から考えて、５世紀中頃の新しい段階に想定することができる。

第14図　中央槨内部の副葬品



第15図　中央槨実測図

西　槨　西槨は、北墳に最後に埋葬された主体部であり、中央槨とほぼ同じ深さで発見された。盗掘を受けずに完存していた。

構造は粘土槨である。但し、東槨の粘土槨と比べると、粘土の厚さは薄く、かつその範囲も狭い。木棺は割竹形木棺である。木棺全長は3.8m 程、最大幅は1.0m 程である。棺内には赤色顔料が塗られており、また棺被覆粘土上には革製漆塗楯が置かれていた。

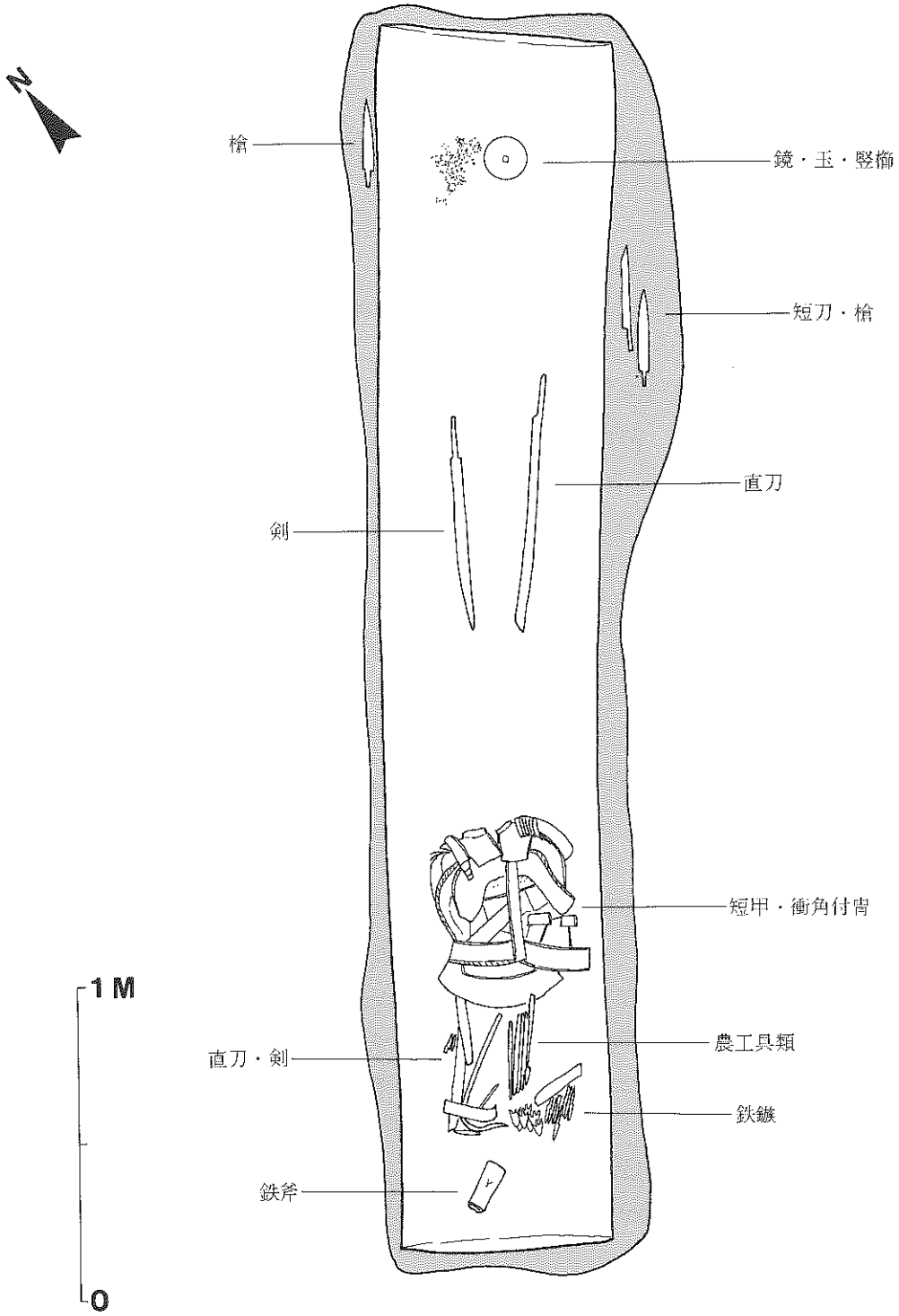
第16図　西槨内部の副葬品

副葬品は、棺内と棺外より発見された。棺内の遺物は、棺北端部に玉類と鏡、そして鏡の下に多数の竪櫛、棺中央部には直刀と剣が各１振、棺南端部には甲冑一式・直刀と剣各１振・鉄鏃17個・鉄製農工具類20余りが認められ、棺外には楯以外に槍２本と短刀１本が置かれていた。

衝角付冑は、短甲胴内に入れられ副葬されていた。

副葬品の棺内配置状況から、人体が棺内に置かれていた場所を想定すると、第17図のようになり、北を頭に埋葬されたと考えて良い。

副葬品の内容は概ね中央槨に近いが、鉄鏃を見ると明らかに中央槨より新しい要素が認められるため、これに後出する年代を考えて良い。



第17図　西槨実測図

Ⅳ　二子山北墳の出土品

北墳の各主体部別の出土遺物の内容と数量は、概ね次のとおりである。但し、東槨と中央槨は、盗掘によって大半の副葬品を失なっている。

(東　槨)…鉄斧(16)、鎌(25)、鉇(16)、錐(9)、ノミ(17)、刀子(2)、鋤(1)、手鎌(4)、ヘラ状工具(4)、その他、以上棺内。

(中央槨)…剣(1)、鉄鏃(51)、鉄斧(14)、鎌(22)、鉇(10)、錐(10)、ノミ(3)、鋤(1)、刀子(3)、鉸具(1)、以上棺内。

矛(1)、槍(1)、刀(1)、以上棺外。その他。

(西　槨)…青銅鏡(1)、玉類(多数)、竪櫛(26)、衝角付冑(1)、短甲(1)、肩甲(1)、頸甲(1)、直刀(2)、剣(2)、鉄鏃(17)、鉄斧(1)、鉄柄付手斧(1)、鎌(2)、鉇(4)、ノミ(2)、刀子(8)、以上棺内。剣(2)、短刀(1)、楯(1)、以上棺外。

東槨・中央槨の盗掘壙内からは、短甲・直刀・鉄鏃などの破片とともに勾玉が出土しており、失われた遺物の一端を知ることができる。

西槨の副葬品の内容を見ると、青銅鏡を始め、玉類・竪櫛などの装身具、衝角付冑・短甲・楯などの武具、直刀・剣・鉄鏃・矛・槍などの武器、鉄斧・鉇・ノミ・鎌・刀子などの農工具類に分けることができ、盗掘を受け一部しか副葬品が遺存しなかった東槨・中央槨についても、状況的に西槨に類する内容の遺物を本来は有していたと考えられる。いずれの主体部も多量の鉄製武器・農工具が副葬品の中心である。

各主体部の副葬品を比べると、鎌では東槨は直刃鎌だけで占められており、中央槨・西槨では直刃鎌と曲刃鎌が存在する。中央槨と西槨の鉄鏃を比べると、西槨の方がやや新しいタイプのものを含んでいる。したがって、前章でも見たとおり、3主体部の埋葬順序は、東槨が最初、次いで中央槨、最後が西槨ということとなる。

以下に、各主体部出土遺物の主要品の内容を見てゆきたい。

青銅鏡　西槨から出土した鏡で、直径13cm 程を測る。半円方形帯神獣鏡である。

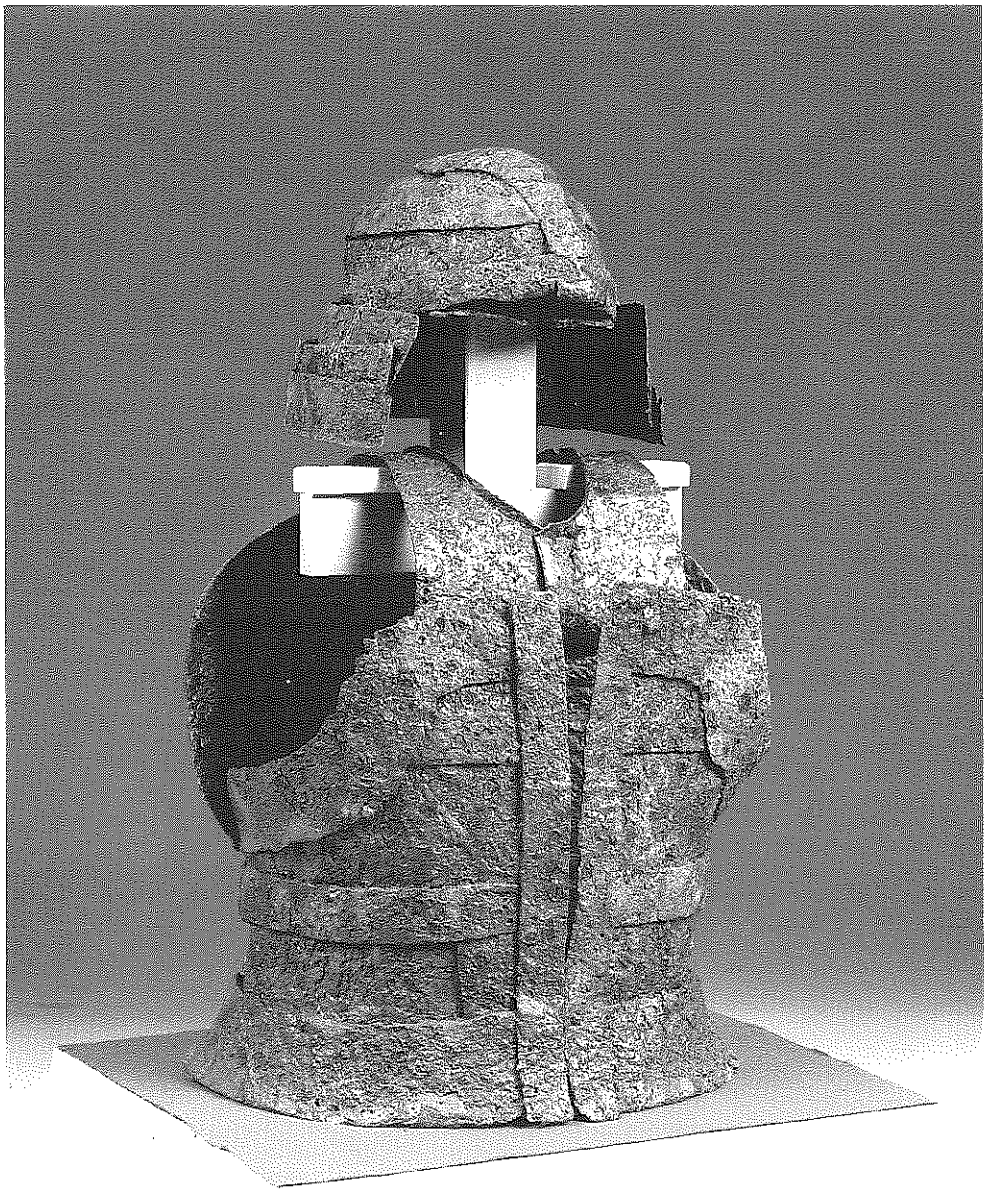
中国から輸入された鏡(舶載鏡)を倭(日本)で模倣した鏡(仿製鏡)である。鏡背面に配される中国の神仙像や空想上の神獣は、本来の姿から遠くはなれ、正体不明なものとなっている。久津川車塚古墳(城陽市)から出土した舶載鏡と比べると、その文様の違いが良く理解できる。

また、鏡背面は使用によるためか、磨耗が著しい。

第18図　二子山古墳の仿製鏡（下）と久津川車塚古墳の舶載鏡（上）

甲　冑　西槨から鉄製甲冑(かっちゅう)が一組出土している。

冑(かぶと)は、正面の形が舟の先(衝角)に似ることよりこの名がある衝角付冑(しょうかくつきかぶと)である。三角形の鉄板を中心に革で綴じ合わせたもので、三角板革綴衝角付冑と呼ばれる。冑には3段の錏(しころ)が付いている。



第19図　西槨甲冑組み合わせ

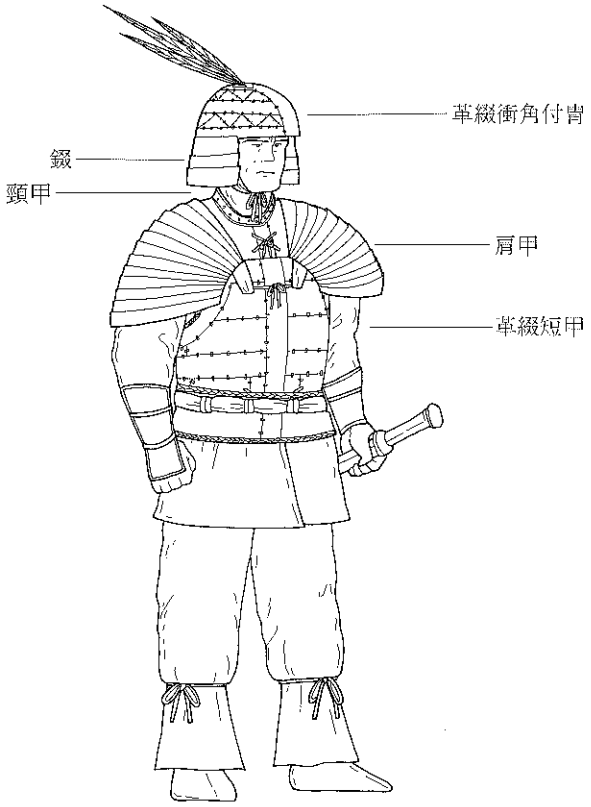
甲は短甲と呼ばれる、胴を守るものである。短甲も衝角付冑と同じく鉄板を革紐で綴じ合わせたもので、長方板革綴短甲と呼ばれる形式である。

付属具として、頸甲と肩甲がある。頸甲は、肩を守る甲であり、肩甲は腕と肩を守る甲である。

これらの西槨出土甲冑を装着すると、下のイメージイラストに復元できる。出土した甲冑は、長い年月の中で銹て赤茶けた色となっているが、本来は鉄板に黒漆が塗られていた。また、冑には山鳥の羽根飾りがあしらわれていたと思われる。

古墳時代の甲冑が、革綴式という旧来の作り方から鋲留式という新しい方法に大きく変換するのは、5世紀中頃からである。

但し、このような鉄製甲冑が一般兵士も着用できたかは、はなはだ疑問である。前線に立たない将ほど性能が良く華麗な甲冑を身に付けるのは、後の時代も同じであろう。



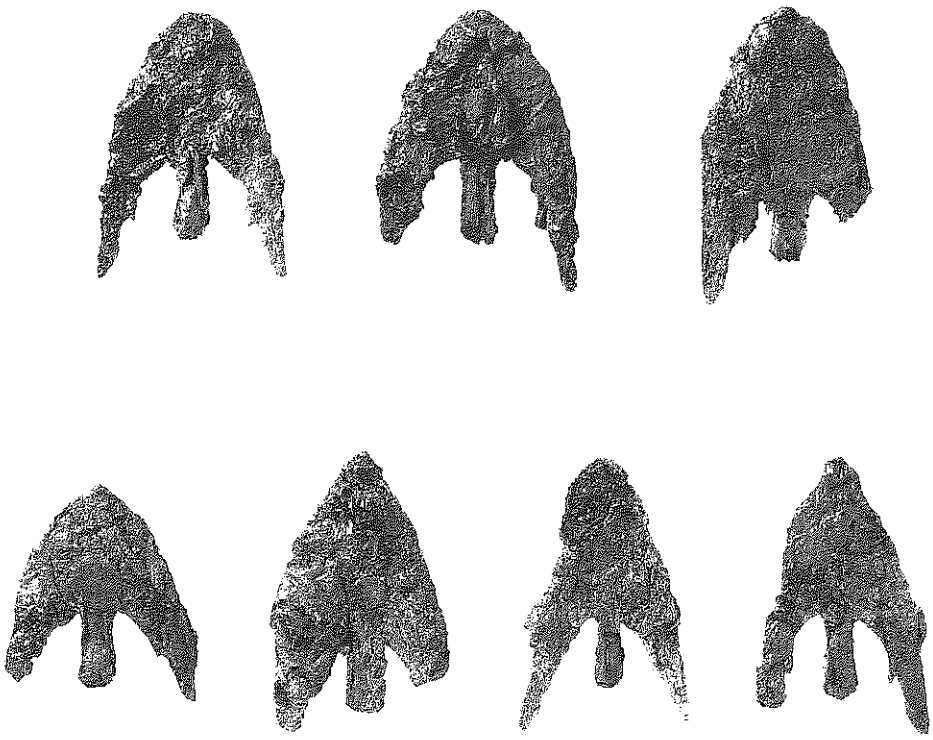
第20図　甲冑を着た西槨の武人

鉄　鏃　鉄鏃(てつぞく)は、矢の先に付ける鉄製の「矢じり」のことであり、中央槨と西槨から出土している。

鉄鏃の種類には、矢に装着する部分(茎(なかご))が平たい「平根式(ひらねしき)」と、尖る「尖根式(とがりねしき)」の両者がある。また、刃の両端は鋭いかえり(逆刺)がつき、殺傷能力を高めたものが多い。中央槨・西槨からは、平根式と尖根式の両者が出土している。

尖根式の鉄鏃は、刃と茎との間の頸(けい)部が時代が新しくなる程長くなる傾向がある。中央槨と西槨の尖根式を比べると、西槨では中央槨のものより明らかに頸部が長くなっているものを含んでいる。したがって、鉄鏃で両槨を比べる限り、中央槨より西槨の方が新しいと判断ができることとなる。

尖根式は、5世紀後半になると、さらに頸部が長くなり、刺突能力を高めた長頸式(ちょうけいしき)と呼ばれるものに変わる。後述する南墳の鉄鏃は、この長頸式が主体となっている。



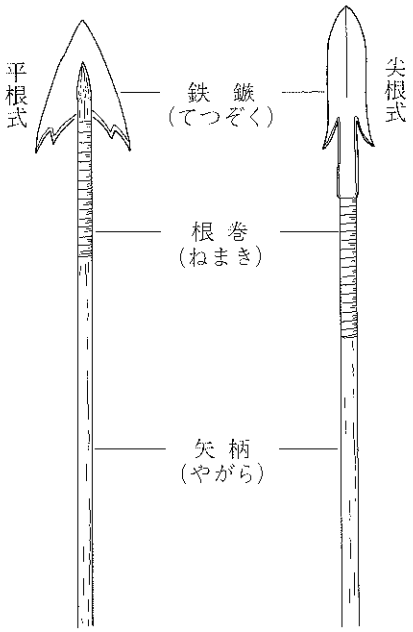
第21図　平根式鉄鏃(西槨)

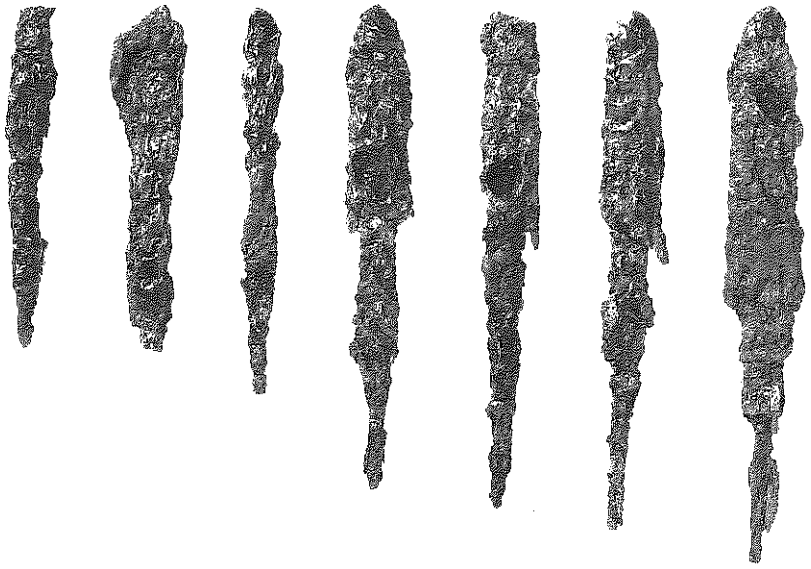
第22図　矢と鉄鏃

矢と鉄鏃の装着を出土遺物に残る痕跡から想定すれば、次のようになる。

平根式では、竹製矢柄の先を半截(はんさい)し、ここに鉄鏃を挟(はさ)み込み、基を樹皮などによる根巻(ねまき)によって固定をしている。尖根式では、茎を矢柄に差し込み、基を根巻して固定する。

鉄鏃先端の角度と装着方法を見れば、尖根式の方が高い刺突能力を持つことが一目で理解できる。



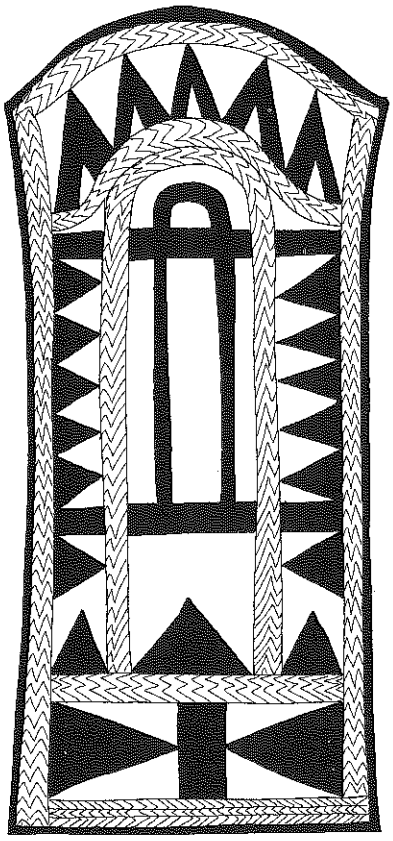


第23図　尖根式鉄鏃（中央榔）

楯　西槨の棺上に置かれていた。全長145cm 程を測る。革製の楯(たて)本体に黒漆を塗った置き楯である。楯の表面には、三角形の文様(鋸歯文(きょしもん))やジグザグの文様(綾杉文(あやすぎもん))が描かれている。

革製の楯本体は腐朽し、その表面に塗られた黒漆だけが残っていた。また、後述する二子山南墳からも同様な楯が一張見つかったが、遺存状況が悪く全容を知ることができない。

おそらくこれらの楯も下図右のように、矢を防ぐのに用いられたのであろう。

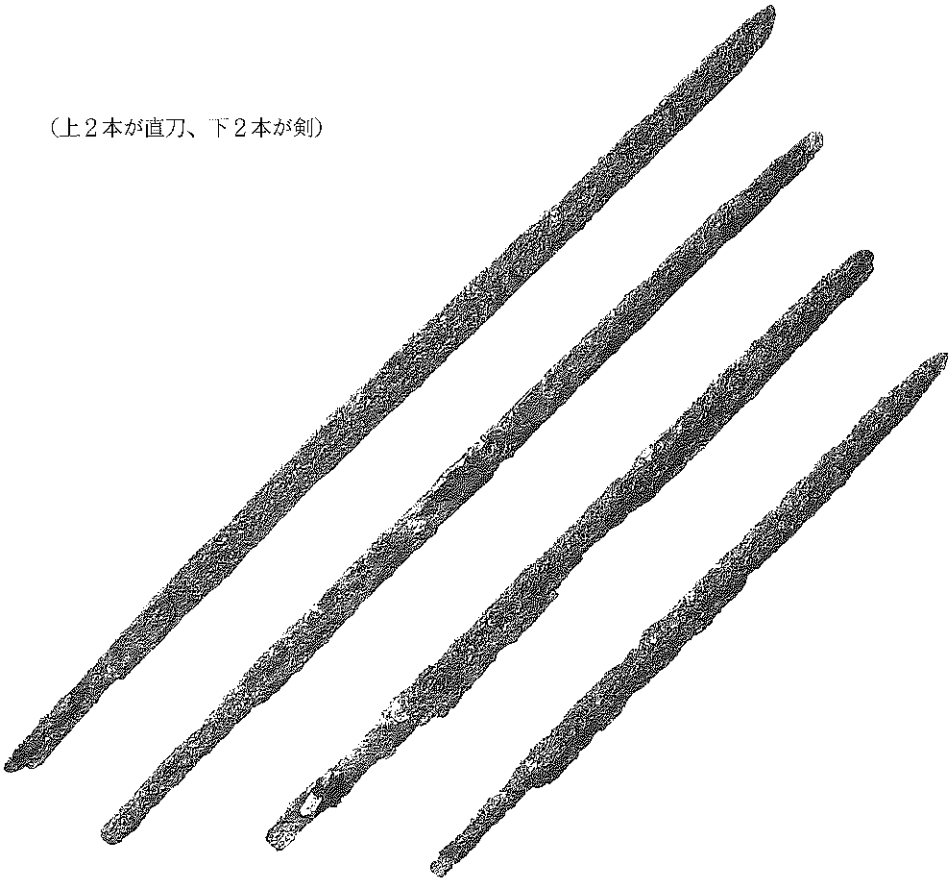


第24図　楯(西槨)と絵巻にみる楯

直刀・剣　片刃のものが「刀(かたな)」、両刃のものが「剣(けん)」である。概ね、刀は切ることに効果があり、剣は突くことに効果がある。

古墳時代の刀は、後の日本刀とは違い、刀身が湾曲せずまっすぐであり、中には内側に湾曲するものもある。これが「直刀(ちょくとう)」と呼ばれる由縁である。刀の峰が外反りし、日本刀の原形が完成するのは、平安時代中期頃からしい。西槨出土の直刀の長さは約90cm 程である。

剣が古墳時代で用いられたのは概ね中期頃までであり、後期になるとほとんど姿を消してしまい、短剣が主流となる。剣は概して直刀より短かく、西槨出土の剣は全長60cm 程である。



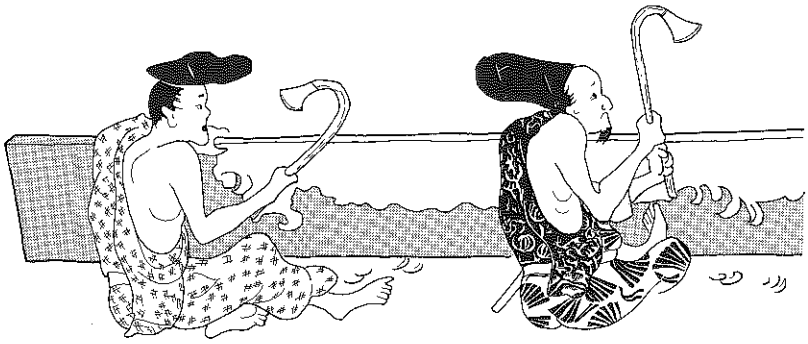
第25図　直刀と剣(西槨)

鉄　斧　鉄製の斧頭が各主体部から出土している。木柄を装着する部分が袋状となるため、袋状鉄斧と呼ばれるものである。

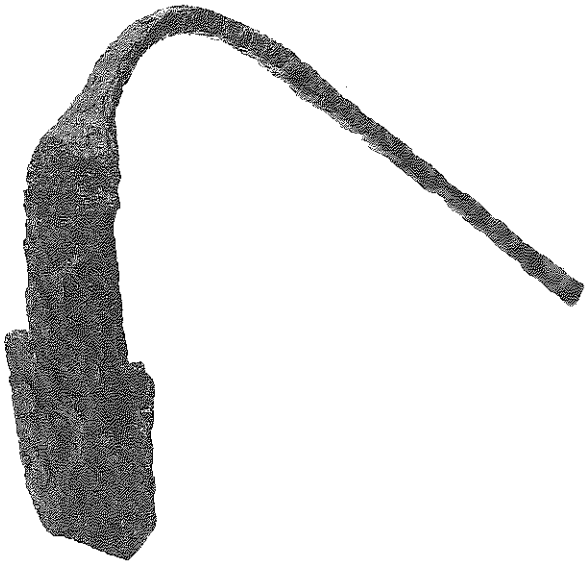
袋状鉄斧の形をみると、柄装着部と刃部とが段をなす有肩式と無段の無肩式とがある。両者は、おそらく斧の機能の差異に起因するものと思われる。これらがいかなる使われ方をしたか明言することは難しいが、肩の張りの強いものは、木材の表面をはつる手斧に使用された可能性は高いし、無肩のものは、木材を割る割斧として使用された可能性は高いと思われる。

また、鉄斧の大きさを見ると、全長15cm 程の実用品に混じって、大きさがその半分程しかないものが中央槨より出土している。これは、大きさ、厚みからいって、実用に耐えない。おそらく、副葬用に模造されたものであろう。このように、実用品を模造し副葬専用品とすることは、古墳時代においてしばしば認められる。

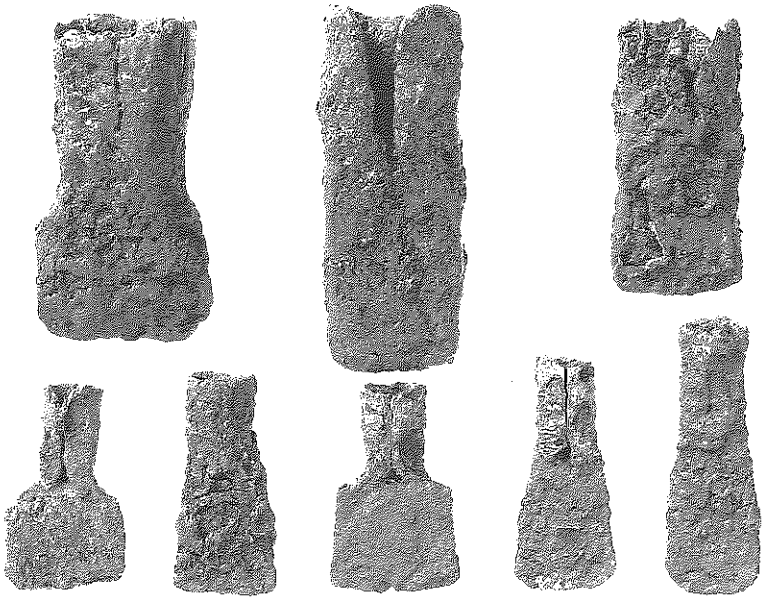
西槨からは、柄の部分まで鉄で一体的に造られている鉄柄手斧が出土している。鉄柄手斧は、現在、全国で14古墳45例程を知ることができ、類例は少ない。最古例は山梨県の大丸山古墳(全長99m の前方後円墳)で、4世紀中頃である。概ね4世紀中頃から5世紀後半代の中で用いられたものである。河内大塚山古墳(全長168m の前方後円墳)から一度に29本が出土しているのを除けば、概ね1古墳あたり1～2本しか副葬されず、また大丸山古墳出土のものには文様が刻まれている。このようなことから、鉄柄手斧は日常の中で使用された工具とは考え難く、「宝器」・「儀器」・「明器」などの非日常的な工具であろうと推定がされている。



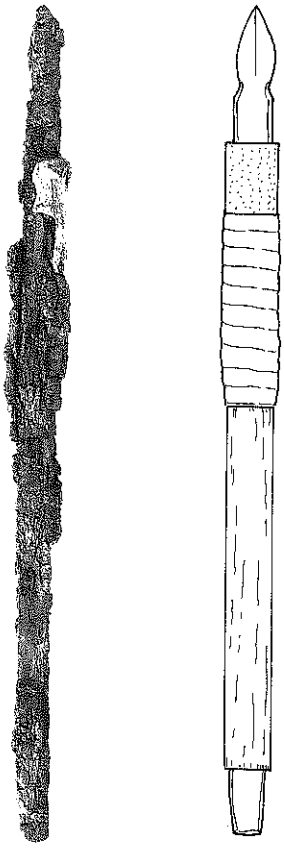
第26図　手斧を使う人(鎌倉時代,『春日権現記』)



第27図　鉄柄手斧（西槨）



第28図　実用鉄斧（上）と模造鉄斧（下）〔中央槨〕



第29図　鉋(西櫛)

鉋　鉋(やりがんな)は、板・柱の表面を削るいわゆる「かんな」の一種で、各主体部から出土している。

刃先は槍(やり)状に尖り、この刃先で少しずつ柱・板表面を削り平坦に仕上げる。

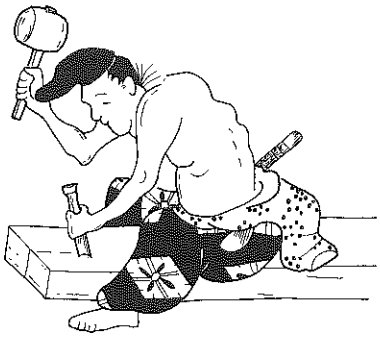
現在一般的に使用される「かんな」は、「台かんな」と呼ばれ、室町時代頃に案出されたものである。それ以前は、鉋が一般的であった。今でも古社寺の改修や建築を行う宮大工(みやだいく)達は、この鉋を使っている。

鉋で仕上げられた板や柱は、おだやかな無数の凹凸が認められるため、一目でそれとわかる。

第30図　鉋を使う人(鎌倉時代、『春日権現記』)

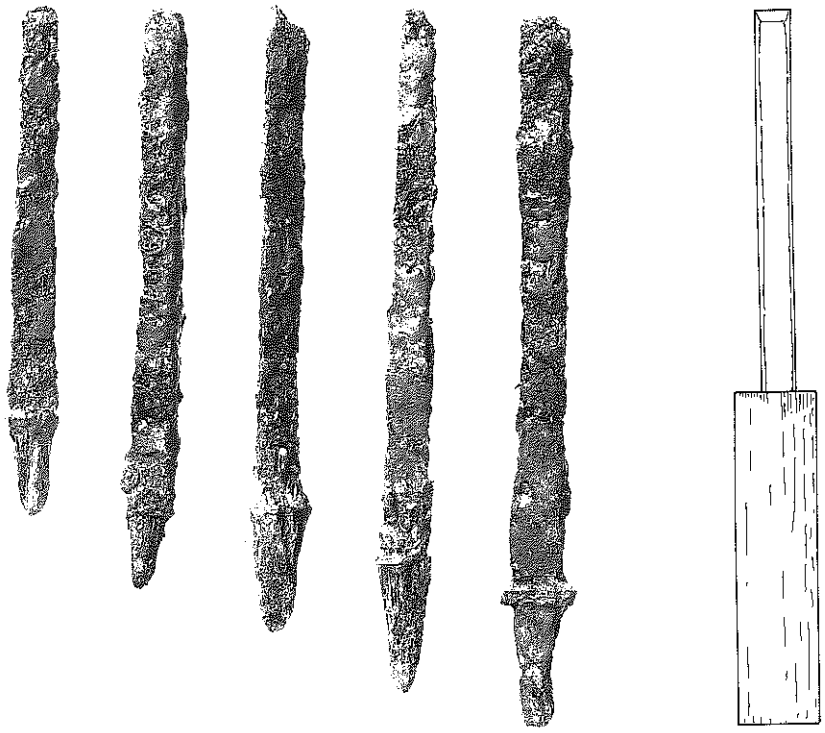
ノ　ミ　漢字では「鑿」と書く。各主体部より出土している。

出土したノミの刃先を見ると、その幅にさまざまな種類があることがわかり、刃先に合わせて用途が変えられていたことを想像させる。幅の狭いものは、おそらく細い細工に、幅広で厚みのあるものは、板の割り出しに使われていた可能性がある。



第31図　ノミを使う人

『石山寺縁起絵巻』の作事場風景の一コマ。角材から板をノミで割り出している。ノコギリで板を製材することが一般化するのは、江戸時代のことである。



第32図　ノミ（東槨）

鎌　各主体部から鎌が出土している。古墳時代の鎌の用途も現在と等しいと思われる。

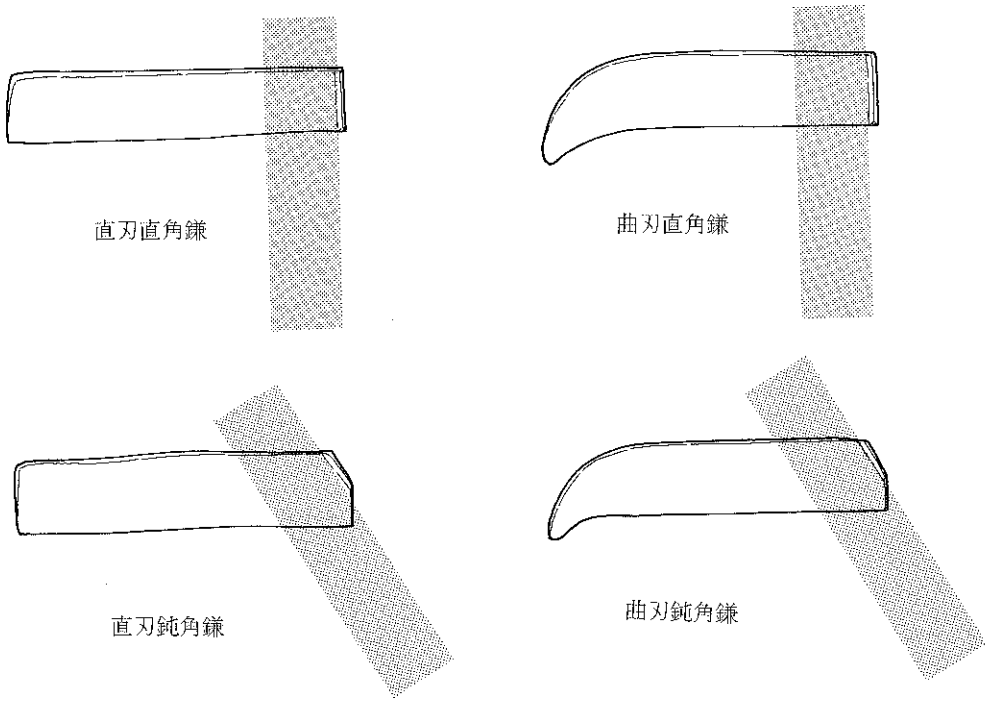
出土した鎌を見ると、刃の形と柄の付き方で下図の４種類に分けられる。

刃の形では、刃が真っ直ぐな「直刃鎌」と刃が内反りする「曲刃鎌」とに分けられ、柄の付き方では、刃と柄が直角になる「直角鎌」と刃と柄が鈍角になる「鈍角鎌」とに分けられる。

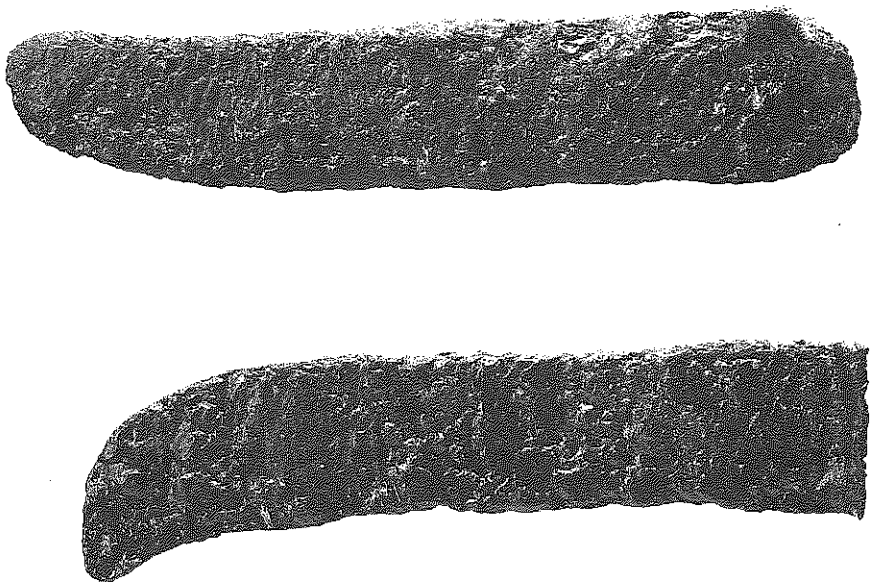
古墳時代では、５世紀中頃に曲刃鎌が出現し、それより前は直刃鎌だけであった。東槨では、直刃鎌だけが出土しているのに対し、中央槨と西槨では両者が認められる。

直角鎌と鈍角鎌に関しては、直刃・曲刃の両者に認められるため、用途による違いと判断できる。

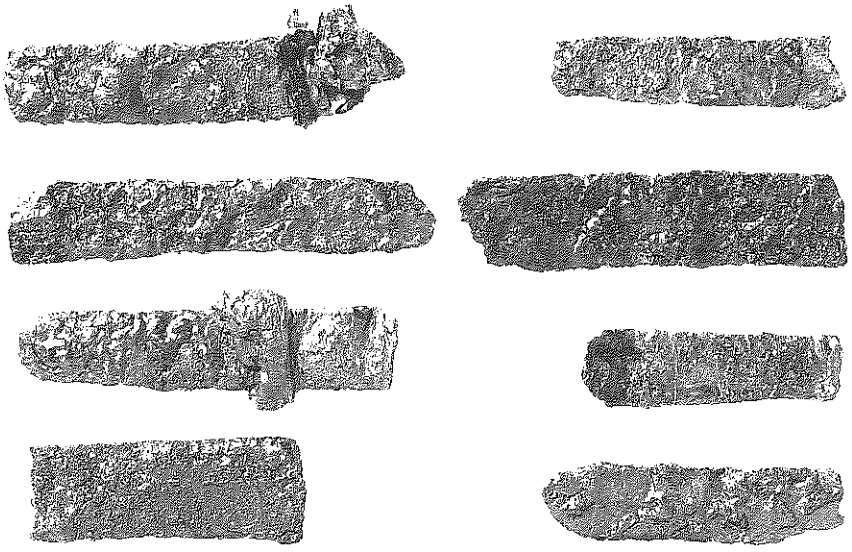
また、中央槨では、長さ６cm 程の小型の鎌が出土している。明らかに実用品ではなく、模造品である。農工具の模造品は、中央槨出土品の中に顕著に認めることができる。



第33図　鎌の種類



第34図　直刃鎌と曲刃鎌(西槨)



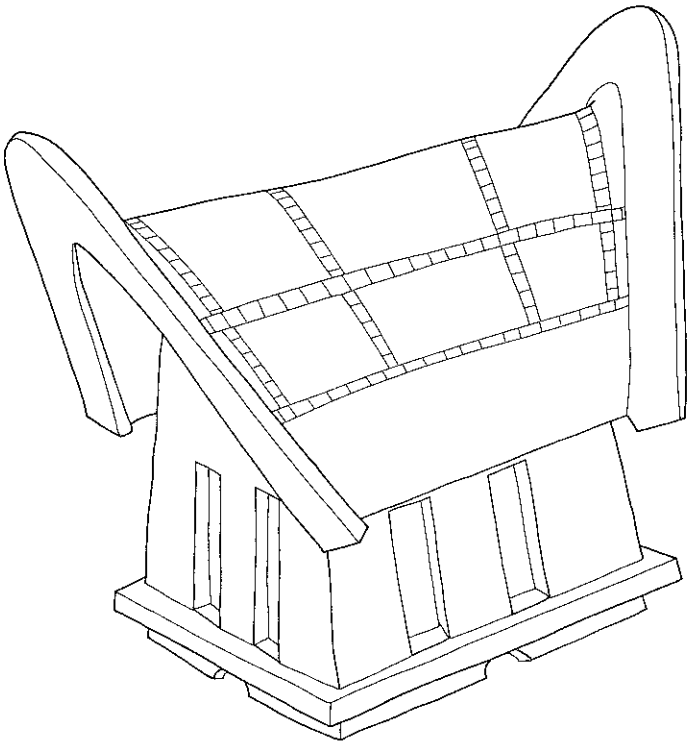
第35図　実用鎌と模造鎌(中央槨)

埴　輪　北墳では、墳丘裾と墳頂部に円筒埴輪列がめぐっていたことが確認されている。円筒埴輪は、筒形をした一般的な埴輪で、下半の一部が土中に埋められ、大半は地上にその姿を出している。したがって、埴輪の検出は、この土中に埋められていた部分のみが見つかることがほとんどである。

円筒埴輪を詳細にみると、外表面の所々に黒色に変化した部分があることに気付く。これを黒斑と呼んでおり、北墳の埴輪が野焼きによって焼成されたことを示している。埴輪が野焼きから窯焼きへ変化したのは、５世紀後半頃と考えられている。北墳の円筒埴輪は、その作り方から見ると、５世紀中頃の特徴をもっており、北墳東槨の年代と同時期となる。

また、北墳からは、形象埴輪片が出土しているため、かつてはこれらの埴輪が古墳を飾っていたことも理解できる。形象埴輪には、家・草摺・靫(矢筒)などの種類が認められるが、いずれも小片のため全形を知ることはできない。家形埴輪の中で破片数の多いものを、復元的に描くと下図のような家となる。切妻式の家である。復元高37cm 程となる。

埴輪は、本来、地表に出ているものであるため、現代までその形を留めていることはほとんどないが、北墳出土の埴輪片から見ると、かつては種々の埴輪によって古墳が飾られていたことは確かである。



第36図　北墳出土家形埴輪

V　二子山南墳

二子山南墳は、北墳に続いて造られた古墳である。江戸時代頃に古墳の表面が改変されているため、円墳か方墳かその形が確定できない。方墳とすれば、一辺34m 程となる。

埋葬施設は、古墳中心部分で一基が見つかった。一部が盗掘により旧状を損ねていたものの、副葬品の大半は残っていた。棺は、板材を組み合わせた箱形木棺の直葬である。棺の全長は約4.2m、幅0.7m 程を測る。北墳とは違って、概ね東西方向に置かれている。

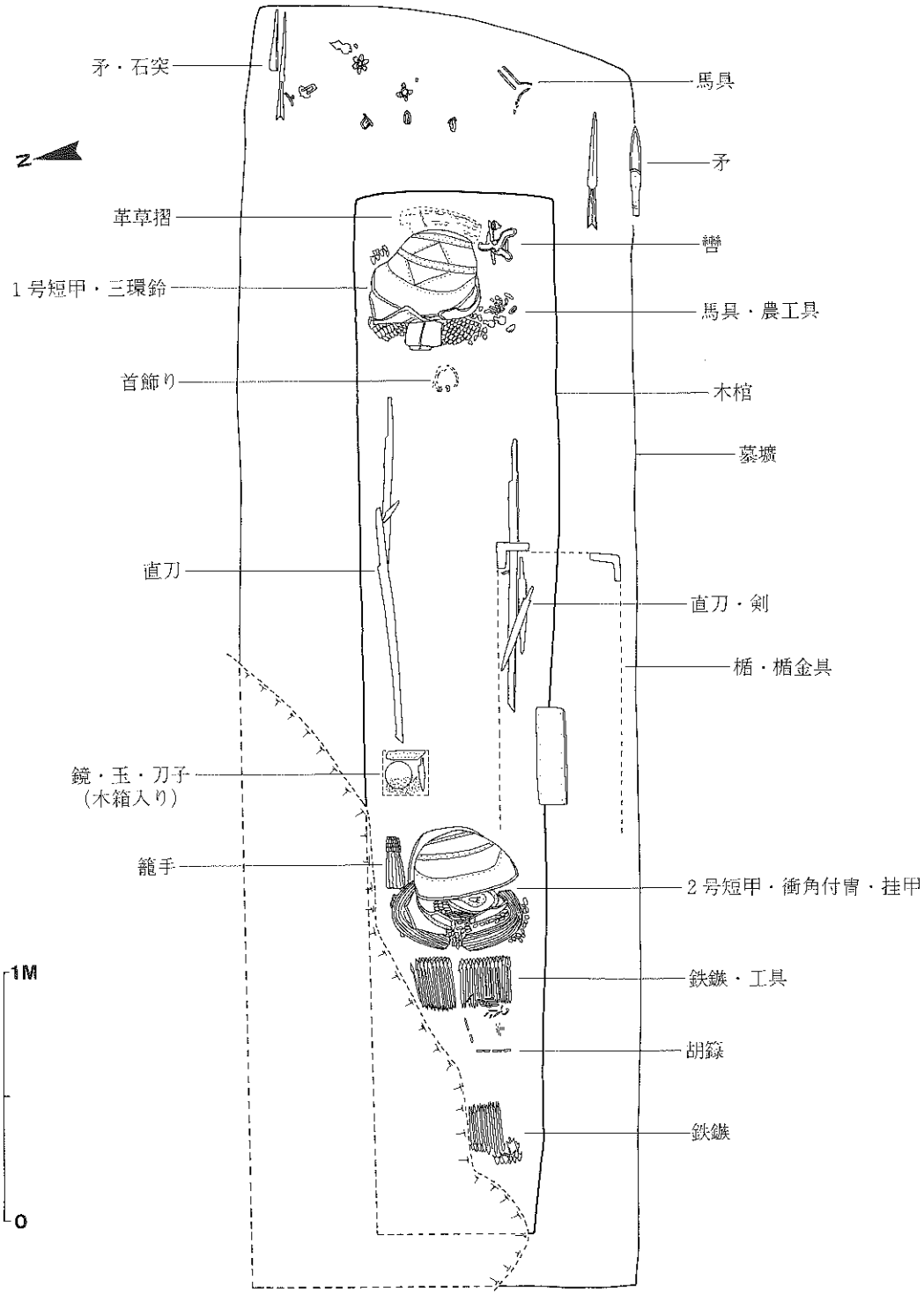
副葬品は、棺外の東端に矛と馬具が、また棺上に革製楯が置かれ、棺内には、東端に短甲（１号）・馬具・農工具、中央には直刀と剣、西端には短甲（２号）・挂甲・冑・鏡・鉄鏃などが置かれていた。挂甲と冑は２号短甲胴内に収納されていた。また、１号短甲の中には三環鈴が入れられていた。鏡付近の遺物は、木箱に入れられていた可能性が高い。

棺内の人体の位置は、首飾りの検出によって確定ができ、東を枕に埋葬されたことがわかる。

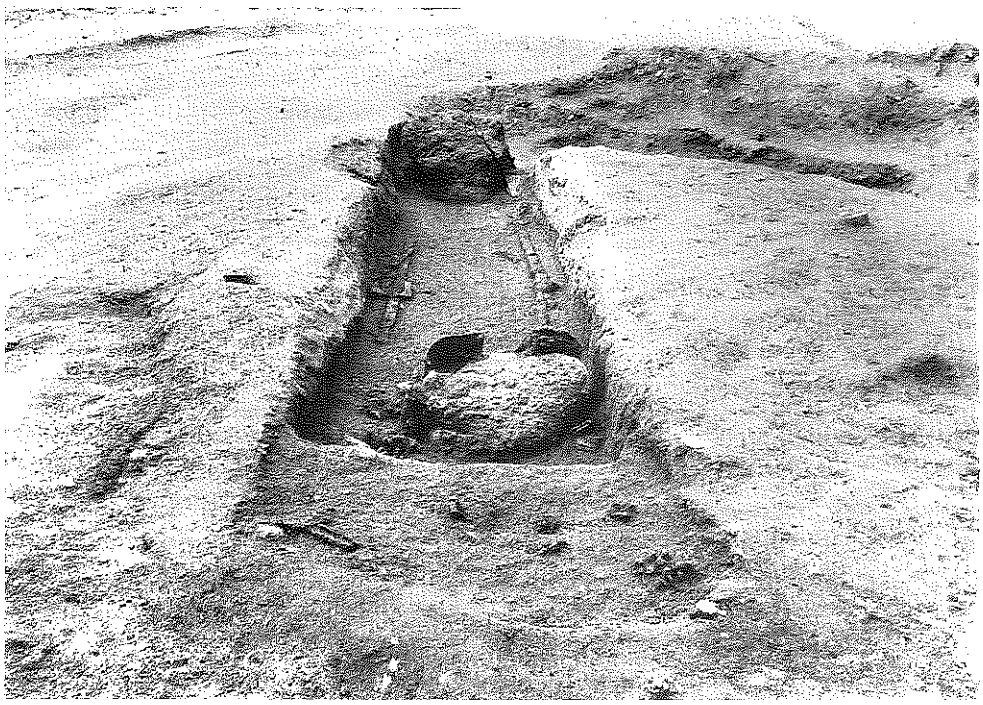
南墳の年代は、５世紀後半頃と推定できる。

第37図　二子山南墳全景（昭和43年）

第38図　南墳の埋葬主体(西から)

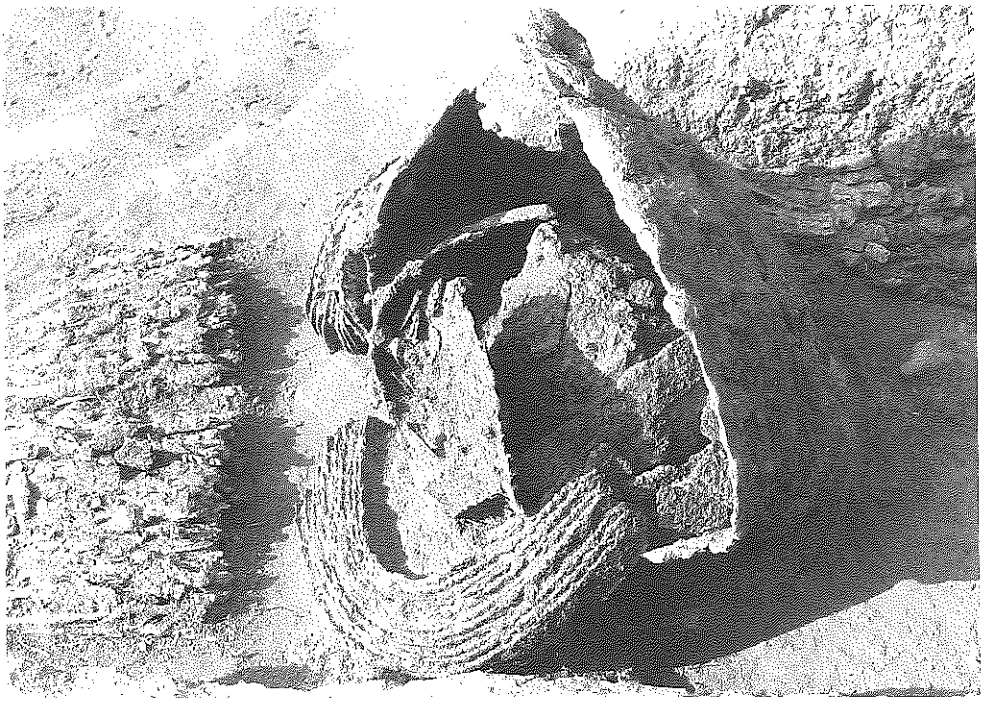


第39図　南墳主体部実測図

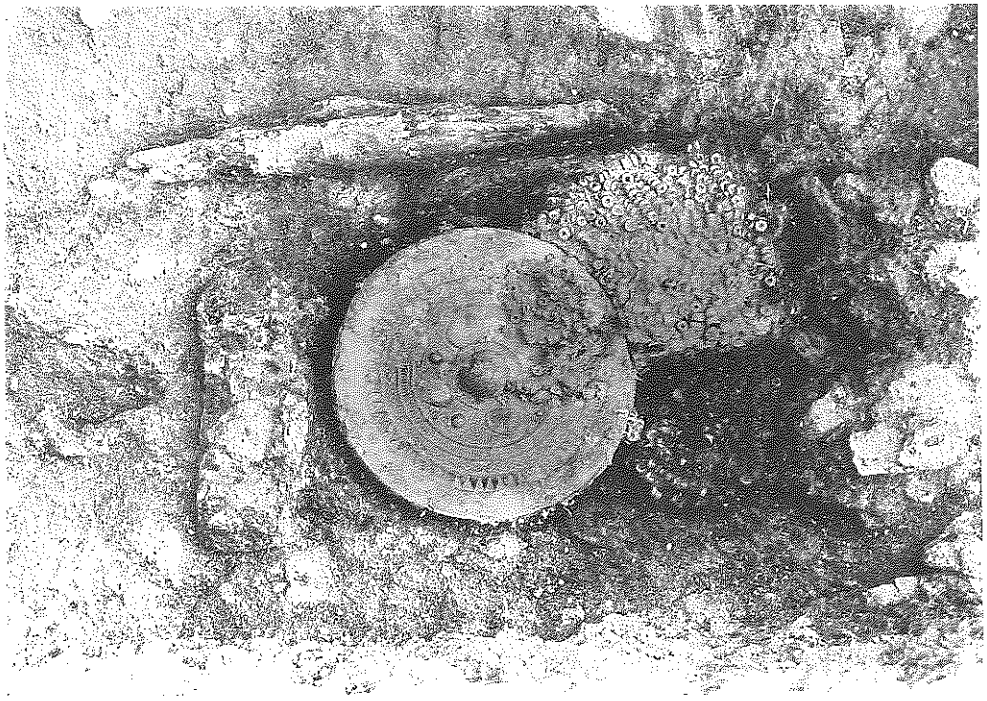


第40図　南墳主体部(東から)

第41図　首飾りの出土状況



第42図　甲冑（２号短甲）出土状況



第43図　青銅鏡と玉類の出土状況

Ⅵ　二子山南墳の出土品

南墳出土の遺物の内容は次のとおりである。

(棺　内)…青銅鏡(1)、玉類(多数)、三環鈴(1)、短甲(2)、挂甲(1)、衝角付冑(1)、頸甲(2)、肩甲(2)、籠手(2)、革草摺(1)、直刀(3)、剣(2)、鉄鏃(120以上)、胡籙金具(1)、馬具(1)、鉄斧(3)、鎌(5)、鉋(2)、針(8以上)、刀子(7)、ワラビ手刀子(7以上)、その他。

(棺　外)…矛(3)、石突(1)、楯(1)、馬具(1)。

南墳主体部は、西端部に置かれた鉄鏃群の一部が盗掘により破壊されており、本来は200本程の鉄鏃が副葬されていたと思われる。

南墳の副葬品と北墳の副葬品を比べると、次の点が異なる。

1．南墳は武器・武具を中心としており、農工具類が極めて少ない。

2．南墳の短甲・冑は鋲留式であり、また、挂甲が副葬されている。

3．南墳には馬具が、副葬されている。

4．鉄鏃は長頸式を主体としている。

これらの諸点から見れば、明らかに南墳は北墳より新しく、年代的には5世紀後半代に置くことができる。以下に、主要な遺物の内容を見てゆくこととする。

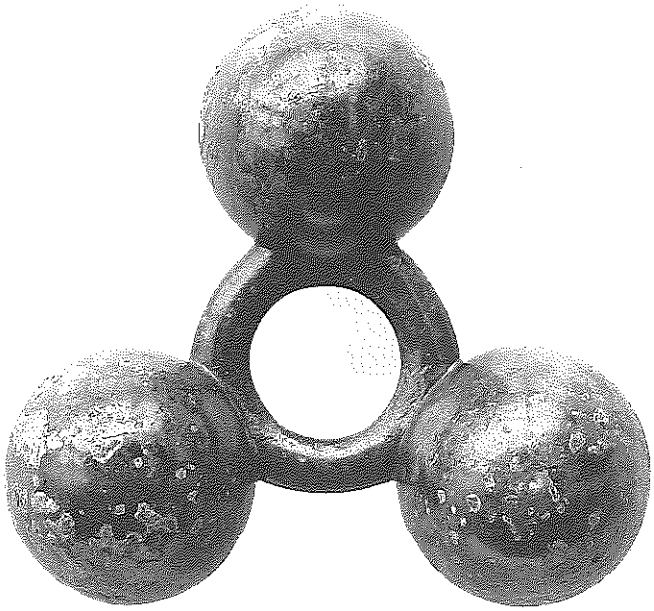
青銅鏡　直径11cm程の倭鏡であり、鈕(紐とおし)周囲に4枚の葉文があるため、四葉文鏡と呼んでいる。この鏡の文様は、完全に日本化されており、中国鏡には系譜をたどることができない。

三環鈴　3個の鈴を銅製の環で連結した青銅製品で、三環鈴と呼んでいる。鈴1個の大きさは、直径5cm程である。振り動かすと、「ガラガラ」という金属音を発する。余りすずしげな音色ではない。

三環鈴は、現在、全国で60例程を知ることができ、京都府下では、他に綾部市沢3号墳出土例がある。類例の少ない珍しい遺物である。

本来は、馬具の一部として使われるものであったようで、発掘例を見る限り馬具と伴に出土することが多い。しかし、本例は、1号短甲胴内に入れられており、馬具としてではなく甲冑に装着された装飾品として使用されていたことがわかる。同様に甲冑と伴に出土した例では、奈良県新沢千塚109号墳例を知ることができる。三環鈴が本来の用途を離れ、転用された一例である。

第44図　青銅鏡(四葉文鏡)



第45図　三環鈴

甲　冑　南墳からは２領の短甲、１領の衝角付冑、２領の頸甲、２領の肩甲、２領の籠手、１領の革草摺、１領の挂甲が出土している。

短甲・衝角付冑は、鉄板を鋲で留めたもので、鋲留式と呼ばれる。１号短甲は、三角板横矧板併用鋲留短甲であり、２号短甲は、横矧板鋲留短甲である。衝角付冑は、横矧板鋲留衝角付冑である。

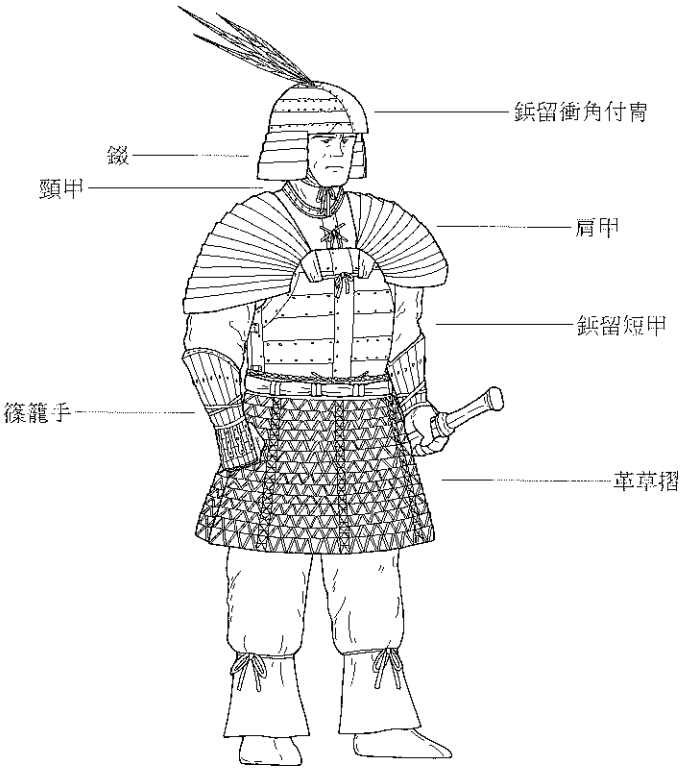
短甲への鋲留式の導入は、革綴式に比べ鉄板の固定が強固になり、その防禦性能を高めた。しかし反面、着用しにくくなったため、右脇に開閉装置を付ける工夫がされている。

肩甲のうち、１号短甲に伴うものは、小札と呼ばれる小さな鉄板を多数革紐で綴じ合わせたもので、類例が少ないものである。

籠手は、手を守る甲で、細長い鉄板を綴じ合わせた篠籠手と呼ばれるものである。

草摺は、脚を守る甲で、南墳出土のものは、革に漆塗りをした革草摺である。

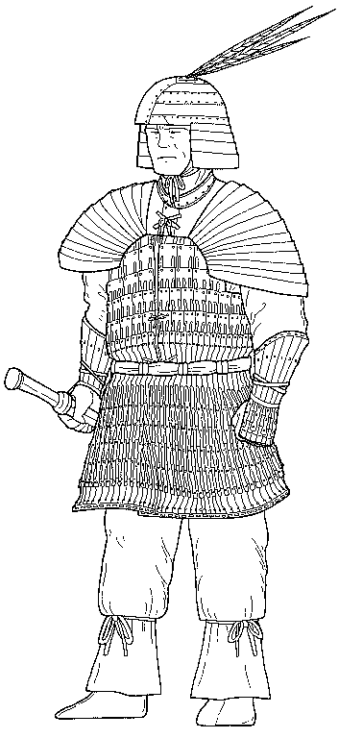
南墳の甲冑類を見ると、北墳に比べて一人当りの甲冑量が多いばかりでなく、付属武具を完備しており、完全武装の武人を思い浮かべることができる。



第46図　甲冑（短甲）を着た南墳の武人

第47図　1号短甲と三環鈴

第48図　2号短甲と衝角付冑

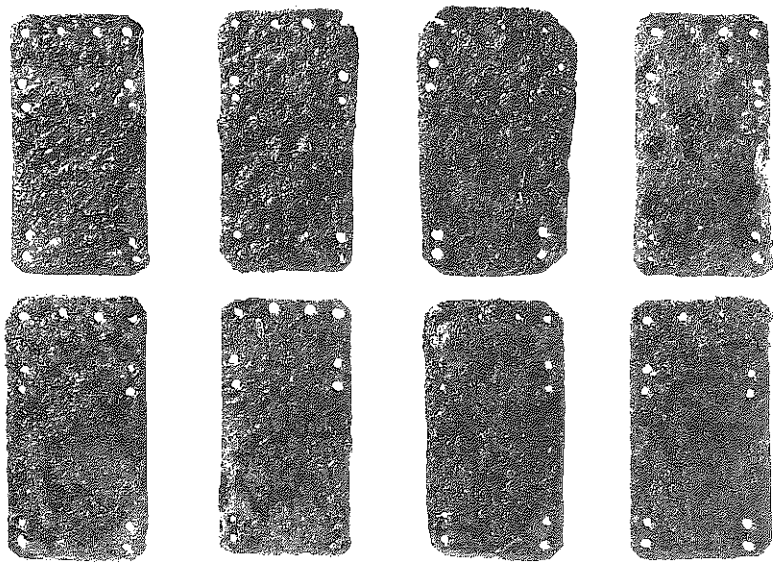


第49図　挂甲を着た南墳の武人

挂甲（けいこう）は、小札（こざね）と呼ばれる小さな鉄板を数百枚も綴じ合わせて作った甲で、短甲と比べると柔軟性に富んでいるため、騎乗に適した甲冑である。

挂甲が日本に招来されたのは、乗馬の風習の伝来と同時期頃であったと考えられ、概ね５世紀中頃以降の古墳から出土している。

短甲は、現在、日本全国で450領程が出土しているのに対し、挂甲は130領程と少ない。しかし、日本の後の鎧（よろい）は、この挂甲の手法を受け継いでゆくこととなる。



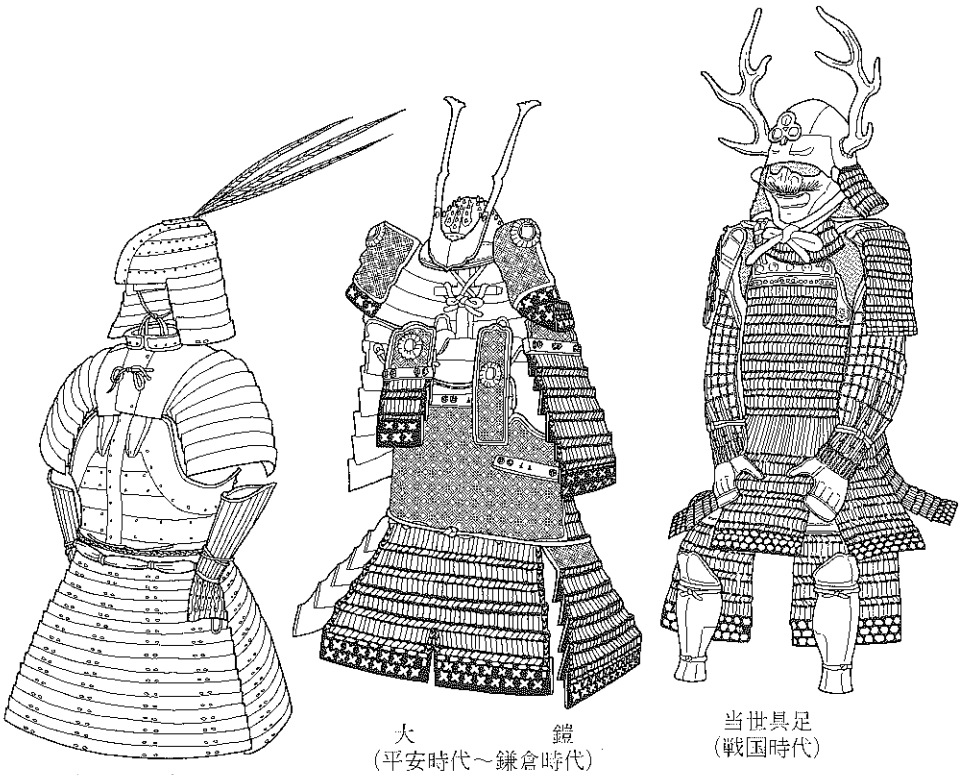
第50図　挂甲の小札

日本の鎧の流れを図示したのが、下図である。戦いで身を守る鎧(甲冑)は、戦争の始まりと伴に出現したと考えられ、日本では弥生時代の木製甲冑が古い例として知られている。

倭の五王の中国への上表文に見る「祖禰自ら甲冑をつらぬき」の文面のように、古墳時代では、多量の鉄製甲冑が製作され、使用されていた。これらは、短甲を中心とするもので、表面には黒漆が塗られ、黒鮮やかな甲冑を身につけたのが古墳時代の武人達であった。

源平争乱の時代になると、大鎧と呼ばれる、日本の鎧の基本的な形ができあがる。大鎧は、挂甲のように小札を綴じ合わせており、そして、その綴じ紐に種々の色紐を用いた華麗な鎧である。日本の鎧の中で最も美しい一群である。

戦国時代になると、鎧は華麗さよりも機能面を重視した当世具足が出現する。戦いのスタイルの変動とともに、鎧も時代ごとに変化をしていったのである。



第51図　鎧の移り変り

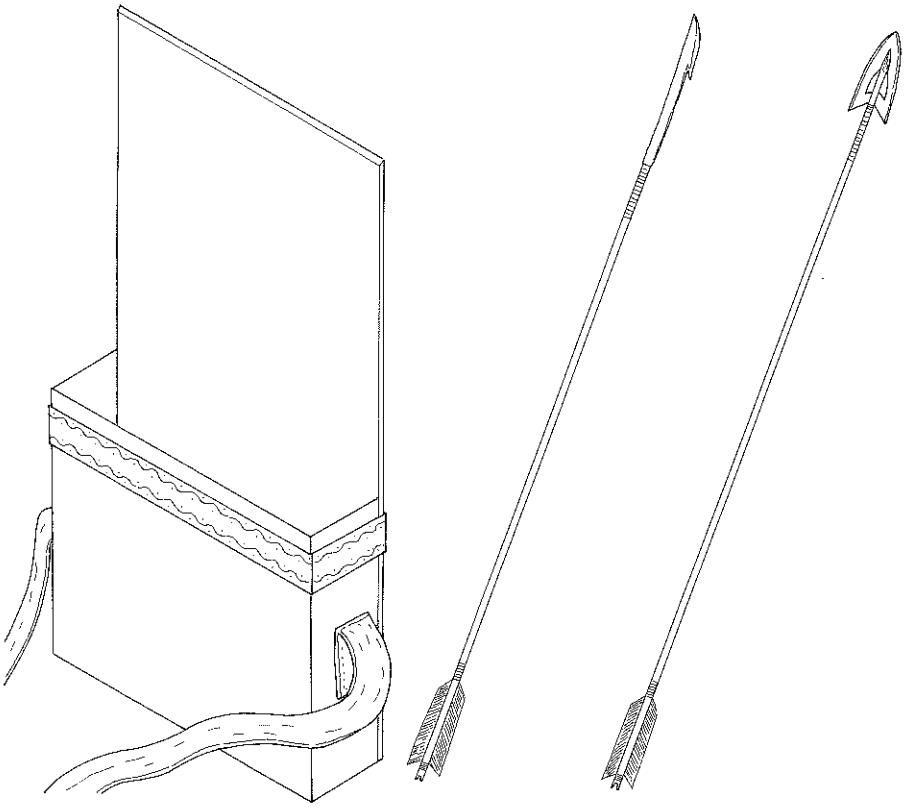
鉄　鏃　南墳からは多量の鉄鏃が出土している。これらは、出土状態から３群に分けることができ、一部に残った金具から、それぞれ胡籙と呼ばれる矢筒に装着されていたことがわかる。盗掘により鉄鏃群の全容を確認できないが、おそらく、一胡籙あたり50本程の矢が入れられ、総数200本程が副葬されていたと思われる。

南墳の鉄鏃には平根式と長頸式の２種があるが、長頸式が圧倒的に多い。

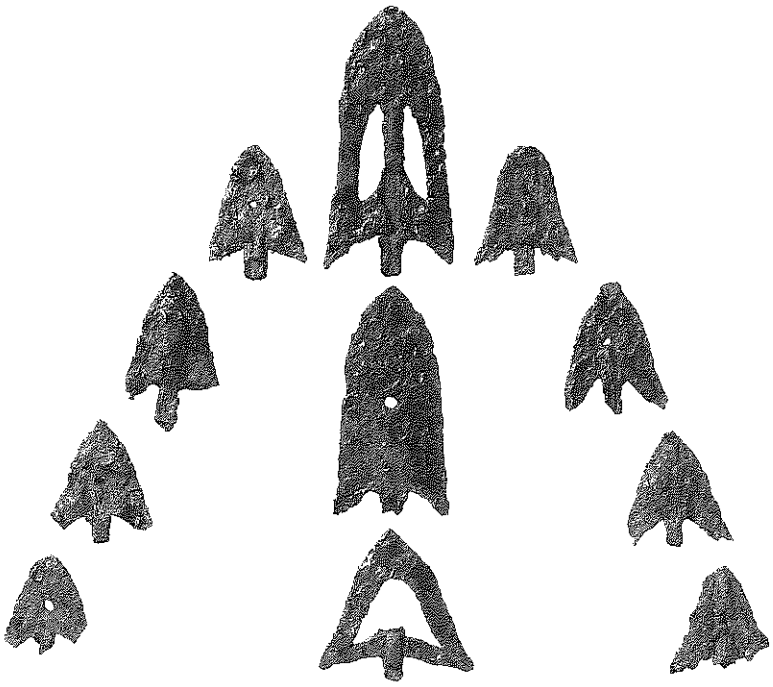
平根式の鉄鏃には、必要以上に大型化したものが含まれており、これらは実戦向きの鉄鏃というよりは、多分に儀式用のものであった可能性が高いと推測できる。

長頸式は、先端部が片刃のものと両刃のものの２種が中心であり、いずれも鋭く重量も従来のものより重くなっている。高い刺突能力をもつ実戦用のものである。

長頸式の鉄鏃が出現するのは、５世紀後半のことであり、この時期直前には鋲留短甲が出現をしている。鉄鏃の変化は、このようなより防禦性の高い甲冑の出現と表裏一体の関係にあると思われる。「石剣は革楯を生み出し、革楯は銅剣を生み出す」という悲しき状況は、戦争の初まりとともに今も続いている。



第52図　胡籙(矢筒)と矢

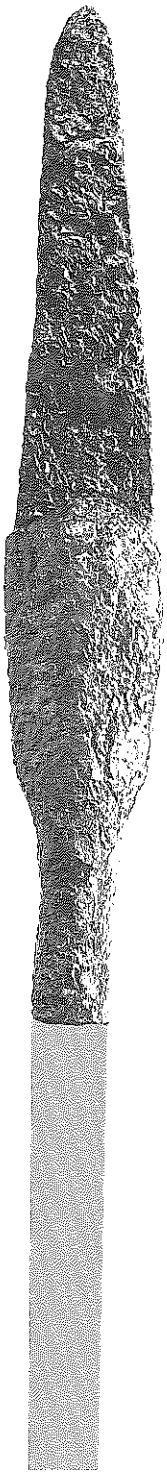


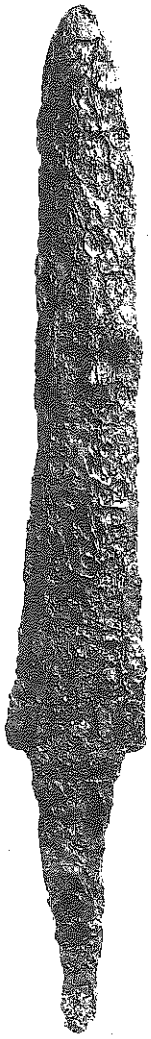
第53図　儀式用に大型化した鉄鏃(中央の３個)

第54図　実戦向きの鉄鏃

矛・槍・剣　矛（ほこ）と槍（やり）は、長い柄の先にそれぞれの刃先を付けたものであるが、柄との装着方法で両者を区別している。左側の矛は、槍身に鉄製柄装着部を挟み込んだ珍しい矛である。

南墳での剣は、すべて短剣（たんけん）となっており、直刀（ちょくとう）・剣の併用時代から直刀主流の時代に移り変わりつつある状況を見ることができる。

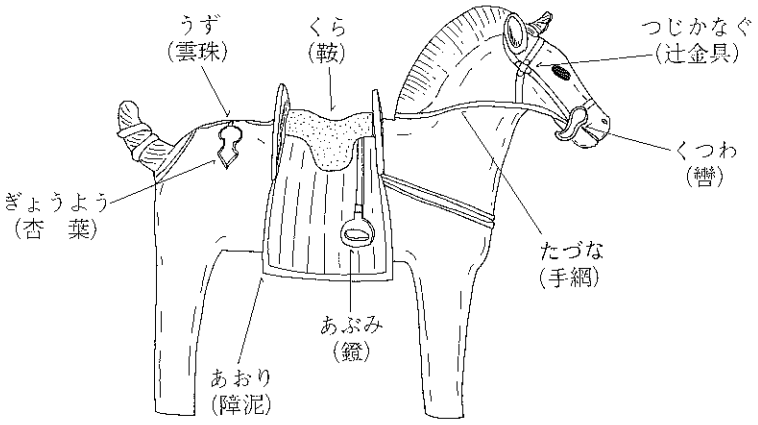




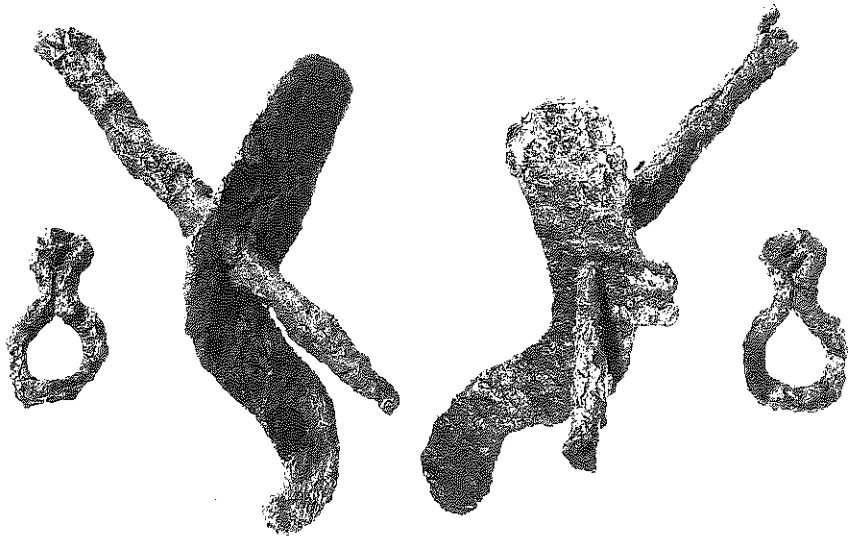
第55図　矛と短剣

馬　具　南墳からは、馬具が一組出土している。南山城地方では、馬具の初現例である。乗馬の風習は、５世紀前半には伝来したと思われるが、一般化するのは５世紀後半以降である。ｆ字形鏡板をもつ轡や小さな剣菱形杏葉などは、古式の馬具の状況を示している。

轡部分が棺内から、鞍周辺部が棺外より出土した。



第56図　馬形埴輪と馬具の名称



第57図　くつわ(馬具)

Ⅶ　二子山古墳の被葬者

宇治二子山古墳に葬られた人物(被葬者)を、出土遺物と古墳の立地を手懸りとして少し考えてみたい。

二子山古墳の副葬品を特色付けるのは、何といっても多量な甲冑と武器であろう。ちなみに、周辺の古墳からの甲冑出土量を表にすると下表のようになる。

この表で二子山古墳の状況を比べると、二子山古墳はその墳丘規模に比べて破格の量の甲冑を副葬していることがわかる。甲冑の量から見れば、久津川車塚古墳にも比肩し得る程のものである。甲冑の多数埋葬が直ちに被葬者の武人的性格を表現するか否かは、なお検討を必要とするが、二子山古墳被葬者が強力な軍事力を有していたことは、充分に予測できる。

二子山古墳の立地は、古来、交通の要衝としてしばしば戦乱の舞台となった宇治橋を見おろす丘陵上である。このことは、二子山古墳被葬者たちが、常にこの宇治川の渡河点に重大な感心を持ち続けたことを端的に表わしている。すなわち、宇治川渡河点の支配が彼らにとっての最重要事項であったとともに、その支配こそが彼らの強力な軍事力を支えた基盤であったと推定できるのである。

二子山古墳出土品からは、甲冑を身に纏った馬上の武人が宇治川を守る姿を思い浮かべずにはいられない。

表　南山城地方甲冑出土古墳

古　墳　名	所在地	墳　形	規　模	甲　　冑
久津川車塚古墳	城陽市	前方後円墳	180m	革綴衝角付冑2、鋲留衝角付冑3、革綴短甲5、挂甲、籠手、頸甲、肩甲
芝ヶ原11号墳	城陽市	円　墳	56m	革綴短甲1
青　塚　古　墳	城陽市	方　墳	50m	鋲留衝角付冑1、革綴短甲1、頸甲、肩甲
原　山　古　墳	和束町	不　明	不　明	鋲留衝角付冑1、鋲留短甲1、頸甲、肩甲
二子山北墳西槨	宇治市	円　墳	40m	革綴衝角付冑1、革綴短甲1、頸甲、肩甲
二　子　山　南　墳	宇治市	円 or 方墳	34m	鋲留衝角付冑1、鋲留短甲2、挂甲1、頸甲2、肩甲2、籠手2、革草摺1

Ⅷ　二子山古墳とその時代

宇治二子山古墳が造られた５世紀、古墳時代は中期を迎え、河内・大和には巨大な古墳が続々と造られていた。

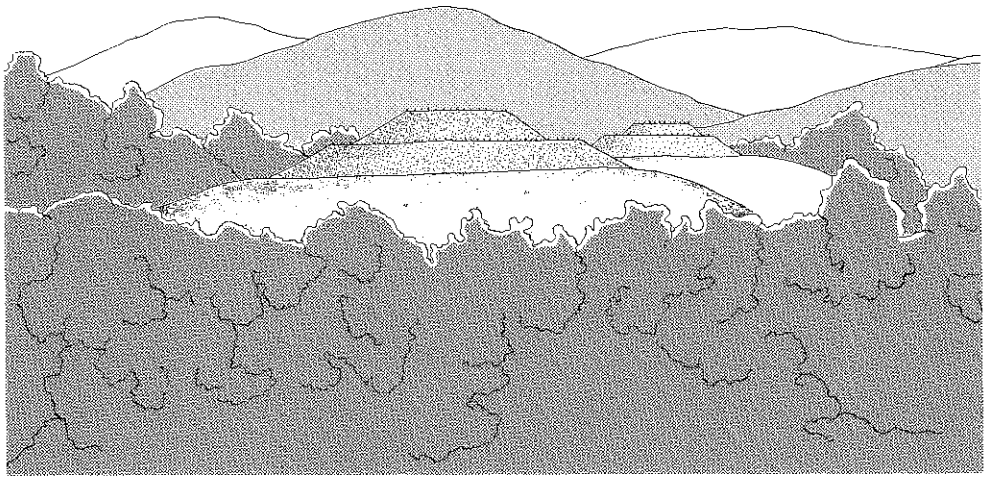
この中で、宇治を含む南山城地方がどのような社会状況にあったのかを、南山城地方の古墳の動向を基に概観し、二子山古墳と周辺の古墳との関係について垣間見てみよう。

４世紀の南山城地方

南山城地方で最古の古墳は、山城町にある椿井大塚山古墳(第３図参照)である。古墳全長180ｍの大型前方後円墳であり、32面以上の三角縁神獣鏡を出土したことで著名である。年代的には３世紀末とも４世紀初頭ともいわれ、この時期、南山城地方には見るべき大型古墳は他にない。

各地区で、古墳が造られ始めるのは、４世紀後半からである。この時期に造られる各地区の首長墓は、50～80ｍ級の前方後円墳ないし前方後方墳を中心としており、男山グループの石不動古墳、茶臼山古墳、東・西車塚古墳、大住グループの車塚古墳・南塚古墳、飯岡グループの車塚古墳、久津川グループの西山１号墳、富野グループの梅ノ子１号墳がその代表例である。宇治グループでは、宇治市役所西側にかつてあった丸山古墳(全長30ｍの前方後円墳)がこの時期に相当する可能性がある。

４世紀後半段階での南山城地方の支配は、古墳の状況から分散化していたことがわかる。



第58図　宇治二子山古墳のイメージ

5世紀の南山城地方

4世紀段階での状況は、5世紀を迎えると大きく変化をする。すなわち、4世紀後半段階で首長墓を造営していた各グループは、古墳の造営を停止するかもしくはその規模を著しく縮小化させ、かわって久津川グループに大型の前方後円墳群が造られるようになる。

久津川グループの大型前方後円墳群で最初に造られたのは、箱塚古墳である。早くに消滅したために、具体的内容を知ることはできないが、周濠を備えた90m級の前方後円墳で、5世紀初頭頃に造られたらしい。次いで丸塚古墳(全長86m)が、そして、5世紀中頃には山城地方最大の久津川車塚古墳(180m)、5世紀後半には芭蕉塚古墳(120m)が相次いで築造されている。

5世紀代での南山城地方の古墳動向を見ると、久津川グループが他を圧倒し、南山城の支配権を確立していった過程を読みとることができる。そして、その覇権が確固たるものとなった時期が、すなわち久津川車塚古墳・芭蕉塚古墳が造られた5世紀中頃から後半にかけての時期であったといえる。

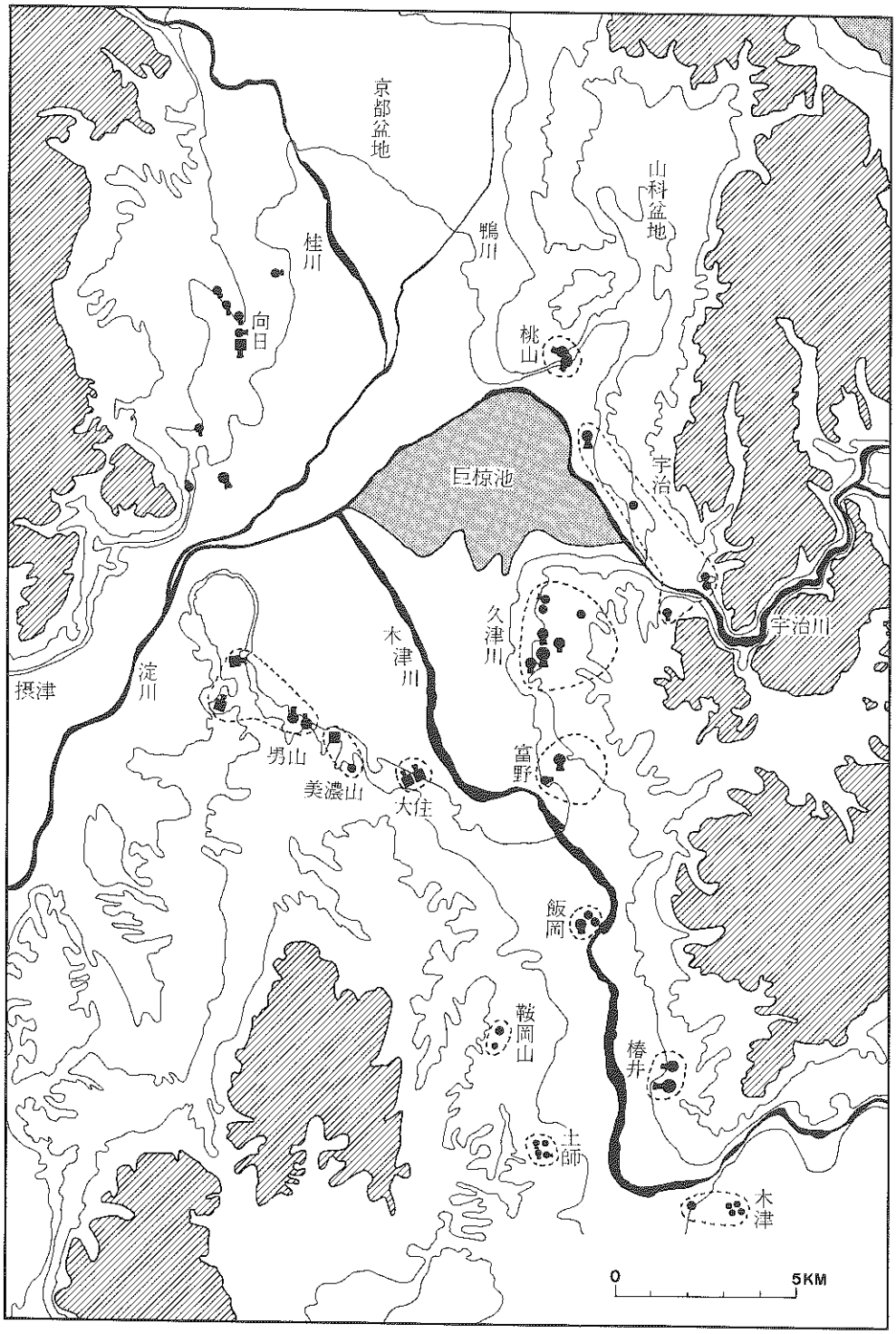
5世紀代の宇治と二子山古墳

さて、宇治市南隣りの城陽市に、このような強大な勢力が台頭した5世紀代、宇治ではどうであったのだろう。

現在、5世紀代の古墳は、宇治二子山古墳と瓦塚古墳とが知られている。宇治二子山古墳は、既に見てきたように5世紀中頃から後半にかけて造られた2基の古墳であり、瓦塚古墳(五ケ庄)は、二子山南墳とほぼ同時期の30m級の円墳である。この両古墳が造られた時期が、すなわち久津川車塚古墳と芭蕉塚古墳が造られた時期なのである。

二子山古墳と久津川車塚古墳との距離は、わずかに4Km。両者が無関係であったはずがない。久津川車塚古墳の成立過程を見てゆくと、当然、宇治は久津川グループの強大な支配権の中に組み込まれていたと考えるのが自然である。要衝宇治川渡河点は、久津川グループの勢力においても重大関心事であったと考えて良い。

このような社会状況の中で、二子山古墳は築造がされているのである。二子山古墳が、その副葬品の内容に比べて40m級の円墳ないし方墳という枠を踏み出すことができなかったのは、久津川グループによる支配体制が強固に貫徹されていたためであろうことは充分に想像ができる。そして、二子山古墳被葬者の持つ強力な軍事力とそれによる宇治川渡河点支配の後ろ楯として、久津川グループの力が存在したことも事実に違いない。久津川車塚古墳・芭蕉塚古墳を中心とする勢力の支配権確立と没落が、二子山古墳の造営時期を重なることは、その一つの証明であるように思う。二子山古墳被葬者は、久津川王権の中で要衝宇治川渡河点を支配した強力な軍事豪族であったと推定できる。



第59図　南山城地方の古墳のグループ

二子山古墳その後

南山城地方に強大な支配力を及ぼした久津川グループは、芭蕉塚古墳を最後に６世紀を迎えることなく終焉する。そして、忽然(こつぜん)として宇治に五ケ庄二子塚古墳が出現をしている。

五ケ庄二子塚古墳は、山科(やましな)盆地にほど近い宇治市五ケ庄に造られた前方後円墳で、墳丘全長110m、二重周濠を備えた堂々たる大型古墳である。築造年代は６世紀初頭、この時期としては京都府下最大の古墳である。

南山城の古墳動向を見る限り、その支配権は６世紀の幕開けとともに、久津川グループから宇治グループ五ケ庄二子塚古墳へと急速に移行したといえる。なぜ、このような現象が起こったのであろうか。

『日本書記』は、武烈(ぶれつ)天皇死後、皇統が絶えようとしたことを記す。そして、新たに北陸・近江を基盤とした応神(おうじん)天皇５世の孫オオド王を迎え入れ、新大王としたとする。継体(けいたい)天皇である。彼は506年に河内樟葉宮(くずはのみや)で即位した。しかし、継体は直ちに大和に入らず、実に20年間も筒城宮(つつきのみや)(田辺町普賢寺付近)・弟国宮(おとくにのみや)(向日市乙訓寺付近)などの南山城諸宮に居続けたのである。大和磐余玉穂宮(いわれたまほのみや)に入ったのは、没する５年前だったという。

現在の見解では、継体天皇が応神天皇の５世の孫という記事は史実とは認め難く、新王朝成立という一大変革がこの時にあったとするのが一般的である。そして、この混乱の中で、継体の大和入りは即位後20年かかったとする。

先に見た、久津川グループの没落と五ケ庄二子塚古墳の成立は、まさにこの継体新王朝成立期と同時に起こっており、かつ、五ケ庄二子塚古墳の造営時に継体は南山城諸宮に居たのである。

このように見ると、６世紀を境とする南山城地方支配権の移動は、継体新王朝成立という変革と密接に結びついていたと考えるのが自然である。すなわち、継体新王朝が南山城支配の勢力関係に強く影響し、大古墳五ケ庄二子塚古墳が新たな勢力として台頭としたと考えられるのである。五ケ庄二子塚古墳が、継体の基盤である東国と彼の諸宮を結ぶ巨椋池(おぐらいけ)そして山科盆地というルート線上に築造されたのは、かかる理由からであろう。

継体新王朝成立という変革の中で宇治二子山古墳被葬者に連なる人達も、久津川グループとともにその命運をともにしたと考えられる。

６世紀代、宇治川渡河点には見るべき古墳はない。これは、この地の重要性が社会変革の中で相対的に低下したと考えられ、再び人々がこの地に重大な関心を持つようになるのは、大化２年(646)の宇治橋架橋を待たねばならなかった。

おわりに

二子山古墳から出土した遺物は膨大な量にのぼり、かつ、その内容は極めて豊富である。これらの遺物群を本書で個別的に取りあげ説明を加えることは不可能であるため、二子山古墳のアウトラインを報告するに留めてある。したがって、説明不足の点や資料提示が充分にできていない面は否めない。二子山古墳の詳細については、本市教育委員会より刊行した『宇治二子山古墳発掘調査報告』を参照していただきたい。

本書の３図と18図に使用した椿井大塚山古墳・久津川車塚古墳出土鏡の写真については、京都府立山城郷土資料館蔵のレプリカを掲載した。また、第20・46・49図の武人イラストは、講談社刊『古代史復元７、古墳時代の工芸』の所収イラストを、第51図は京都国立博物館刊『日本の甲冑』所収イラストを加筆トレースして掲載をした。第３図測量図は京都大学文学部『椿井大塚山古墳と三角縁神獣鏡』より転載した。

本書が、二子山古墳と宇治の古墳時代の理解に少しでも役立てば幸いである。

平成3年3月30日発行

『宇治二子山古墳とその時代』

発行者　宇治市教育委員会
製　作　河北印刷株式会社

UJI-FUTAGOYAMA BURIAL MOUND

The Uji-Futagoyama mound tombs are located at Uji City, Kyoto Prefecture. These mound tombs consist of two mound tombs and stand at the top hill on the right bank of the Uji river.

The north mound tomb is a circular one. Its diameter is 40 meters and 4.3 meters high. There are three burial institutions on the central part of mound. Two of them has been almost destroyed. The other one remains perfectly. The burial articles discovered from these burial institutions are an iron armor, an iron helmet and many other weapons, and also iron agricultural implements, iron tools, a bronze mirror, beads, and so on.

The south mound tomb is a circular or square one. Its diameter is 34 meters and 4.5 meters high. This mound tomb borders on the north mound tomb. There is one burial institution on the central part of mound. The burial articles are three iron armors, an iron helmet and many other weapons, and also horse ornaments, a bronze mirror, beads, and so on.

The north mound tomb was constructed in the middle of 5 th century. The south mound tomb was constructed in the end of 5 th century. That is to say, both of them belong to the middle phase of the Kofun period. Judging from the burial articles, these Uji-Futagoyama mound tombs are the representative of the chieftains tombs in the middle phase of the Kofun period in the Uji area.

UJI-FUTAGOYAMA BURIAL MOUND
AND
THE KOFUN PERIOD

THE BOARD OF EDUCATION OF UJI CITY
UJI, KYOTO, JAPAN